全国同人雑誌最優秀賞 第16回 まほろば賞 発表

昨年からまほろば賞は全国同人雑誌協会と文芸思潮が主催することになりました。今後もこの形で進めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いします。

第一六回新全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二二年七月一七日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が鋭利に批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。

昨年から、「まほろば賞」は受賞作品には、賞状と賞金三十万円（賞金は主に寄付によるものです。また二人同時受賞の場合は、恐れ入りますが、一人二十万円とさせていただきます）および記念トロフィーを贈らせていただくことになりました。河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円および記念品を贈らせていただきます。優秀賞にも記念品と賞金五万円を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの同人雑誌の作品が全国同人協会・全国同人雑誌振興会及び文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいっそう多数の方が御参加くださるようお願いします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの手でこの賞を盛り上げ、育てていっていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切にお願いする次第です。

またこの結果及び選評とその感想・批評の動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第16回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「光復香港」
（「季刊作家」99号）
鈴木友範

「『よもつ耶』～更待月のこと」
（「札幌文学」91号）
海邦智子

河林満賞

「鴉」
（「南風」48号）
紺野夏子

読者賞

「夢で逢いましょう」
（「朝」42号）
天野いずみ

まほろば賞賞金は、木内是壽氏、故蘭藍子氏、三田村博史氏、来の宮あんず氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏、「北斗」などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「べん」「海」「文芸中部」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。

みた　まさひろ
1948　大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」「少年空海アインシュタイン時空を超える」「天海」
日本文藝家協会副理事長
武蔵野大学名誉教授

二作同時受賞

三田誠広

今回は作品のレベルが例年より高かった。とくに二作品の評価が均衡していて二作同時受賞となった。『よもつ耶～更待月のこと』（海邦智子）は死に近いタクシー運転手の車に次々と乗客が乗り込み、はかない人生のさまざまな局面を見せていくという構成で、リアリズムを超越した幻想的な作風が効果を挙げている。最後に乗り込んできたのは主人公の亡くした妻と子で、そのまま車は黄泉の国に旅立っていくようだ。単なる思いつきの幻想譚ではなく、そこには作者の確固とした世界観、死生観がこめられていて、揺るぎのない作品世界を構成している。『光復香港』（鈴木友範）はぼくと同世代の書き手で、かつての学生運動と現在の香港の民主化運動を重ね合わせた構成に工夫があった。半世紀前の日本の学生運動を描いた部分は作者の実体験なのだろう。現在の香港を描いた部分も作者の体験から生じたものと思われ、双方の世界にリアリティーがあった。学生運動を描いた作品は多く書かれているはずだが、現代の香港と重ね合わせることによって、独自の視点が設定されている点を高く評価したい。

他の候補作も充実していた。『鴉』（紺野夏子）は長く消息を絶っていた父親が、実はつい最近まで存命していて、母親とは文通していたという設定で、娘がその父親の住居を訪ねていくところから始まる。娘にとって父親は過去の人だ。ところが父親が書斎にしていたと思われる部屋の窓の外には鴉がいてこちらを見ている。鴉は父親の姿を探しているようにも見える。そのあたりから、家族とは何かという深く重いテーマが、重厚な文体とともに読者の胸に迫ってくる。『水水母』（木山葉子）も濃密な文体が作品世界を支えている。別れた夫が大量に保有していた学生時代の女友達からの手紙が、ヒロインの胸に癒しがたい傷を穿っている。その過去へのこだわりが、精神を病んだような幻想的な断片が交錯する独自の作品世界へと読者を誘う。リアリズム作品と見ると辻褄の合わない点が多く他の委員の賛同を得られなかったが、ぼくはこの作品の独創性を評価したい。

時代の空気を描いているという点では、『村上君と優のこと』（若栗清子）に注目したい。ロシアのサハリンから来たという金髪の少年と、母子家庭の息子との交流を描いた作品で、ありきたりな差別を受けながらも前向きに生きようとする少年たちの姿が明るく鮮明に描写されている。とくに金髪の少年が髪を黒く染め、日本人の少年が金髪になるという展開がおもしろく、小説としての楽しさがあった。『夢で逢いましょう』はいくぶん軽い文体で、不本意な閑職に回された中年女性が、夢と幻想の中にのめりこんでいく姿が描かれている。文体が軽いということはリーダブルなのだが、それが災いして軽い読み物と思って読み飛ばされる惧れのある作品だ。しかしじっくり読んでみると、幻想にすがらざるをえないヒロインの孤独感が伝わってきて、なかなかの秀作だと感じられた。

他の選考委員の評価が得られなかった『サイクロイド』（荻野央）に、ぼくは一つの可能性を感じた。サイクロイドというのは直線上を転がっていく円の円周上の一点の軌跡を描いた曲線なのだが、数学になじみのない人にとっては聞き慣れない用語だろう。作者は詩人としての素養のある人のようで、この作品も散文詩といっていい文体で、断片的な叙述がアトランダムにつながっていく構成になっている。それでもテーマはある。二人いる娘のうちの一人が障害をかかえているのだ。ぼくは障害者本人や家族が書いた作文コンクールの選考を十年くらい続けているので、障害者の悲喜こもごもの日常については数多くの作品を読んできた。そこにはさまざまな世界観が描かれているのだが、障害者をかかえた家族には一種の哲学が必要だという点では一致している。この作品にも哲学がある。しかしそれはヒューマニズムとか、運命を受け容れる諦念とかいったものとは隔絶した、きわめてユニークな視点だ。書き手が詩人であり、また数学にも見識をもった人で、そこから詩的な想像力とサイクロイドという図形のもつ不思議なイメージが結びついた、独特な詩的な言辞が次から次へと心地好く紡ぎ出されて、魔法のような作品空間が現出することになる。残念ながら既存詩人の作品を引用したところが二箇所あり、効果を挙げているようでいながら、作品としての独自性を損なっているように感じられる。また詩的なレトリックが高踏的で多くの読者がついていけないという難点は確かにある。だが小説というのは本来、何をどう書いてもいい自由なものだ。読者がどう思おうと、これを書きたいという切実な思いがあれば、書きたいことを書けばいいのであって、作品の評価などは二の次というべきだろう。こういう作品が掲載されているところに、同人誌というものの存在意義があるのだと強く感じた。

同人雑誌の質の高さ

小浜清志

こはま　きよし
1950沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87作家中上健次に師事、マネージャーを務めるかたわら文学修行
88「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」「光の群れ」「火の闇」などがある

今回は七作品と少し多めではあったが、どれも趣があり同人誌の質の高さを覗かせてくれた。

「村上君と優のこと」若栗清子

五月の午後、という独特な書き出しで始まるこの作品はウラジオストクから転校してきた村上ミハイル君と息子の優の付き合いを見守っている母の視点から展開していく。「私」は二年前に離婚してフラワーアレンジメントの職を得て優との二人暮しを始めたばかりである。五月の午後に優が友だちを連れてきた様子があったので茶菓子をお盆にのせて運んで行ったとき知らない国から来た少年であることを知る。その日から連日のように白金に近い髪の少年は2DKのわが家を訪れる。

それから半年くらい経って事件が起こった。優が叫ぶ「毎日同じ服を着ている。汚いって、女子が」二枚のセーターを交互に着せていたが女子の目にはダサイ汚いとしか映らなかったであろう。「私」はすぐに車をとばしてデパートへ。優が心配するほどにブランドの服を買いあさる。この行動もそうであるが、作者の優しさが至る所にちりばめられている。六年生になってもミハイルは毎日のように通ってきて時々夕飯を共にするようになる。決して裕福な生活をしている訳ではないが、優の友だちということでミハイルをいつも歓待する心の豊かさは卒業式にも現われる。ミハイルの母親を色々と詮索する声が聞こえる。私はそれらの声に対抗するようにユリアさんの隣りに座り、生まれたばかりの赤ちゃんの可愛らしさを手ぶり身ぶりで伝える。そのような行動をすれば周りから揶揄されるかも知れないが、私にはどうでもいいことで、ユリアさんの孤立に寄り添いたい。その心は優にも受けつがれていて、中学生になりミハイルが「北方領土を返せ」と同級生に言われたことを聞き、ある日突然に黒髪を金髪にする。だが、ミハイルも黒髪に変え、二人向き合ったとき大笑いをして髪は二人とも元に戻るという出来事でも相手を思いやる心のあり様がこの小説の美しいところである。

「鴉」紺野夏子

中学生の時に家を出たままになっていた父の家を見て来て欲しいと入院した母から頼まれ冴子は戸惑う。何十年も前にいなくなっていた父が生きていて、母は連絡を取っていた。冴子は両親のなれそめに想いをはせ、夫婦の有り様の不思議さを感じながら、母の頼みで二度目の父の家の訪問をする。そこで大家さんと出会い父の現状のすべてが解明する。年上の母は代々医者の家に育ち、自らも医師として生きている。母の結婚を祖父母は快く受けとめたが、周りはそうでない者が多かった。だから親類の集まりがあると着慣れないスーツを着て、席の隅でコップを傾ける父を冴子はひっそりと眺めるのが常だった。

のけ者のような父は親類の中ではカラスのような存在ではなかったか。また、社会的にも立派な肩書きの母とは違い、大工仕事が得意な父は母とはあまりにも不似合いだったから家を出たのではないか。作者の筆は冴え、タイトル通りの読後感を残してくれた。

「サイクロイド」荻野央

大失恋から小学生の頃の団体競技を思い出す。円転するリングの中の自分に接近してくる大空の太陽と雲。くるくるまわるリングの永遠性。そして、二人目の子供が障害を持って生まれてから、平凡に円転していた生活の連続が二番目の世界に強制的に局限される。色々な挑戦を試みていることは理解できるのだが、円転したことのない私には挑戦の理由を見い出すことはできなかった。

「水水母」木山葉子

水母と海水の明確な区分ができないように、この作品も現実なのか妄想なのか判然としないまま展開している所が最大の魅力であろう。結婚式をあげて三日目に目にした夫の高校時代の女性川島冴子からの大量の手紙から妄想が走りだす。

出張から戻った夫に手紙の束をさし出し処分してと訴えるが、安易に頷いてくれない。仕方なく夫が手紙を焼いていると姑が起き出してきて夫のしていることを咎め、絵里子をなじった。絵里子の目には部屋にある置き物さえ川島冴子の贈り物に見えてくる。手紙に出てくる若村という男が二人の結婚を祝いたいと言って待ち合わせをする。若村らしい男の近くで絵里子は待っていたが、現われた夫は冴子のいる方へかけていき、二人の会話がはっきりと聞こえる。これは不自然な書き方ではないかと思ったが、このことすらも妄想だとすればつじつまは合ってくる。

手紙すら妄想で作りあげた産物ではないかと想像してしまう。小説の力にあらためて感動した。

「『よもつ耶』～更待月のこと」海邦智子

当選作になった作品であるが、まず文章とは何でも作りあげることができるのだということに驚いた。この世とあの世の境に建つ「よもつ耶」で繰り広げられる男の苦悩。

妻子をガス自殺でなくした男に、真湖ママが釘を刺す。「あんた、後追って死ぬ気でしょ。そんなこと誰も許さないわよ。あんたのあの世の扉が開くまで、その日が来るまで生き抜くの、どんなに孤独で苦しくても」

そして、男はよもつ耶の住人となり、タクシーの運転手をして糊口をしのいでいる。客待ちの場所はいつもの坂の上。深夜だというのに老婆が乗り込んでくる。老婆は初雪が降ると死んだ主人の墓参りに行くという。その婆さんが指につけていたアメジストはかつて男が二月生まれの女房に贈ったものだった。

不思議な婆さんを乗せてから一ヶ月位、中年の女性がタクシーに乗り込んで来た。行き先はジャンプ台のある大倉山。女がジャンプ台で練習をしている息子の思い出を淡々と語る。短いラインの文章を残して息子は空へ消えたという。そして、次々と現われる乗客の誰れもが辛い過去をひきづり懊悩しながら生きていることを知らされる。

最後に死んだ女房と息子が乗り込んでくる。心地よいリズムの文と、あり得ないがくっきりと浮かんでくる状景に文学の気高さを感じた。

「夢で逢いましょう」天野いずみ

夢の中で男と交わっていた。夢の中で感じるのは初めてだった。その快感がすさまじかったので、下着にそっと手を入れてみたが、何の変化もなかった。書き出しのインパクトのすごさに引き込まれた作品だった。

「光復香港」鈴木友範

現代の香港と過去の学生運動をからませた力作である。描写も構成も素晴らしく、私は一番強く押した。香港の有り方もかつての学生運動も歴史に潜んでいる不条理との戦いであるが、それらは時間の流れに淘汰されていくだろうとの予感が、この作品の素晴らしい所である。

重い量感とユニークさ

五十嵐勉

いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ

早稲田大学文学部文芸科卒

79「流謫の島」群像新人長編小説賞

84-90カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長

主著「緑の手紙」（読売新聞・NTT　プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞）・「鉄の光」「ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院へ」「破壊者たち」

第一六回まほろば賞は、結果的に選考が三つに割れた。「鴉」「水水母」への支持、「サイクロイド」「村上君と優のこと」「夢で逢いましょう」への支持、「『よもつ耶』～更待月のこと」「光復香港」への支持と分裂した。三田氏は「サイクロイド」と「水水母」「『よもつ耶』～更待月」を高く評価し、中上氏は「『よもつ耶』～更待月」と「光復香港」を評価した。小浜氏は「光復香港」を買っていた。

私はどれもいい面があり、捨てがたいものがあったので、悩んだが、「光復香港」の重い量感と、「『よもつ耶』～更待月」のユニークな表現は、称揚を外すわけにはいかないと思い、最後に提案された二作受賞に同意した。このように分裂したのは、それぞれがいい作品であることの証左でもあるだろう。

鈴木友範氏の「光復香港」（「季刊作家」99号）は、出張先の香港で民主化運動の弾圧に巻き込まれていくのと同時に、自身の学生運動を回顧し、反抗の情熱の意味を問い返す作品である。香港の学生たちの反抗の姿が鮮やかに浮かび上がると同時に、自身の革命へ投じた情熱の挫折の辛酸と苦渋が交錯して、理想に向けて抵抗する人生の陰影が掘削される。結局は圧殺されるしかないその結末に、人間としてどう希望に繋げるか、胸に受け止めるべきものは提出されている。全共闘世代も、今しか書き残せない時期に入っている。さらに書き続けて残すべきものを残していってほしい。その願いを込めて、「まほろば賞」に強く推薦した。

同時受賞となった海邦智子氏の「『よもつ耶』～更待月のこと」（「札幌文学」91号）は、発想が独特で、タイトル、ペンネームからして変わっている。ルビなしでは読めない言葉が、むしろ独自の世界を切り開いている。そしてその風変わりな世界の底に、死へ旅立っていく者の深い悲愁が流れている。この死者を包み込んで流れる旋律に、魅力がある。葬送の美しい調べがあるところに、胸底への刻印がある。これを大事にして、この世界造形を持続していってほしい。

河林満賞に輝いた、紺野夏子氏の「鴉」（「南風」48号）は、地味な題材だが、彫拓の手腕には、注目すべき力量がある。これで三度目の優秀作登場になるが、どの題材も鮮やかに処理して、小説作品として形を与える技量は高い。しかもだんだん精度が上がっている。一読した時よりも、読み込むに従って、精緻な味わいが奥を増してくる。失踪した父親の最期を、空家に棲む鴉との交誼に託して、枯らせるように終わるシーンは、人生の乾いた一つの結末を象徴している。あの世から、河林満も授賞を喜んでくれていると思う。

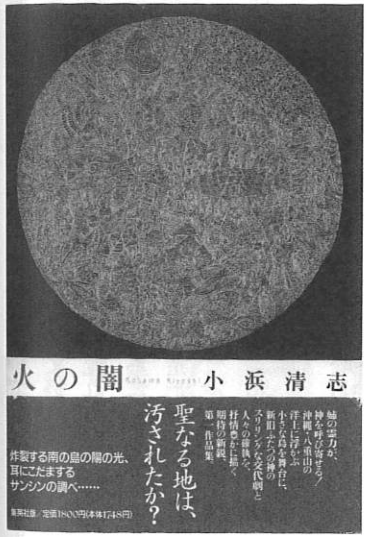
読者賞を獲得した天野いずみ氏の「夢で逢いましょう」（「朝」42号）は、タイトルが一見歌謡曲を想わせる軽さを有しているが、中身をよく読むと、練りあげられたわかりやすい文章の奥に、厳しく磨かれた言葉の艶があり、それがある安定した構築を示している。長年の鍛錬による表現力であることが窺われ、酔いに誘われる奏鳴感を宿している。更なる結実をめざして、創作を持続してほしい。

若栗清子氏の「村上君と優のこと」（「素粒」18号）は、ロシア少年と息子の交流を描いて、すがすがしい読後感がある。昨今、国際化する社会変化の波を受けて、近所や学校にも外国人の姿が珍しくない。この作品の場合は息子の友達がロシア人で、その友情の中に、ドラマが生まれ、事件と行為を通して宥和していく過程がよく描かれている。そのストーリーは感動的であり、さわやかである。ただ、息子の友人がロシア人であることは、読まないとわからないので、やはりタイトルにロシア人の名前を入れた方が、内容によく繋がっていくだろうという感想は変わらなかった。結末ももっと盛り上げられたかもしれない。

「水水母」（「木木」33号）の木山葉子氏は、今回も卓越した文章力を示していて、選考委員の評価は高かった。高校時代の異性の手紙を結婚後も大切にとっておく夫との心理の齟齬から、夫婦間の亀裂は、人生そのものを深く割いていく。その陰影の機微が、打ち寄せる波音のように生の波打ち際に響いてくる。最後の水水母の夥しい死骸が、何を象徴しているのかわからないまま、ただ、漠然と、自然に置かれているところに、この筆者の深い力量も感じられる。しかし、その微妙なところで、もう一つ鮮明に結像して見せてくれると、筆者の一段の到達がなされるように思う。

荻野央氏の「サイクロイド」（「風の道」16号）は、幾何学模様をそのまタイトルにした特異な小説で、障害者を子供に持つ運命をそのサイクロイドの軌跡図に重ねて、筋を運んでいく手法は、斬新で洒落ている。このような小説の書き方もできるのかと、その自然な叙述の流れに感心した。これは普通の小説の構築性とはまったく別なところに組み立てられる新奇な試みで、深刻な運命を、まったく異次元の運命模様として高次に祀り上げてしまう、快い抽象感がある。ただ、引用が過多で、それに寄り掛かり過ぎているのが惜しまれた。

総じて、今回もレベルの高い作品群で、昨今の芥川賞作品のレベルを凌駕する内質を備えていたことは喜ばしいことである。商業文芸誌の作品など、蹴り飛ばす勢いで、書くべきものを書いていってほしい。



刺激的な色彩

中上紀

なかがみ　のり

1971　東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99「イラワジの赤い花 ミャンマーの旅」（集英社）を上梓
同年「彼女のプレンカ」（集英社）ですばる文学賞受賞
「悪霊」（毎日新聞社）「いつか物語になるまで」（晶文社）「夢の船旅―父中上健次と熊野―」（河出書房新社）「アジア熱」（大田出版）「シャーマンが歌う夜」「水の宴」（集英社）「海の宮」（新潮社）「熊野物語」（平凡社）「天狗の回路」（筑摩書房）など著作多数

今も昔も、夏は私にとって特別な季節だ。夏を過ぎると、なぜだか一年がリセットされたような、ある意味「正月」に近い感覚が心身に生じる。小説を書くようになってからは特にそうで、夏毎開催される複数の行事と、それらにまつわる仕事を中心に日々が回る。行事を終えるとほっとし、来年の夏を考える。いつからか、この「まほろば賞」選考会も、大切な夏のイベントの一つとして私の中に在る。選考会が夏であるのももちろん理由だが、それ以上に、優れた候補作品たちから放たれる強い色彩が、灼熱の太陽と相まって多分に眩しく刺激的だからだ。

さて、今年は、いつもより多い七作の候補作品を読ませていただいた。今の時代を生きる人間、人間が作る社会の様相が、どの作品の文字の間からもにじみ出ていると感じた。

例えば、まほろば賞受賞作となった、鈴木友範氏の「光復香港」。現在あるいは近年の香港の民主化デモと、主人公自身が日本での学生時代に関わった「学生運動」の章が、交互に進んでいく構成となっている。今のアジア情勢が描かれることで、日本の「かつて」の時代は決して、断絶した「かつて」ではなく、地続きであることが伝わってくる。日本の過去に確かに存在した学生運動を振り返りながら、日本人が見るべきアジア、知るべきアジアが見える。たとえば、私たちは想像する。ウイグル自治区に住む人たちが直面している苦境を。あるいは台湾はどうだろう。東南アジアも深刻だ。ミャンマーでは軍によるクーデターから一年半、今でも多くの民衆、とりわけ若い人たちが抵抗を続ける。だが、不当な逮捕、拷問、住居の焼き討ち、空爆などの深刻な人道危機が日々繰り広げられる状況は、ウクライナの戦況を伝える報道の陰になり届かない。

本作の中では日本人である主人公自身はあくまで「外国人」というマイノリティのくくりに属し、その視点からフィリピン人のヘルパーであるジェニーとのやりとりなどが書かれていることも、興味深い。大きな抑圧に抗おうとして

いる香港学生が、自分の家のヘルパーにはぞんざいな態度をとるというアジア的な矛盾にも注目したい。

もう一作品のまほろば賞受賞作を紹介する。海邦智子氏の「『よもつ耶』～更待月のこと」だ。子供と妻を失い、夜間のタクシー運転手に転身した主人公が、業務を介して出会った人々から、彼らの物語を断片的に聞いていく。いつしか読み手は、このタクシーが、死にたい人に次々と出会いながら夜を走る、すなわち死と背中合わせの乗り物であることに気づくのだ。

この作品の中に登場する坂の上の〈よもつ耶〉という磁場は、「黄泉比良坂」から来ている。生者の住むところと死者の住むところの境界にあるという黄泉比良坂。記紀では、火の神を産んで死んだ女神伊邪那美尊を、男神伊弉諾尊が、来るなと言われていたにもかかわらず黄泉の国に追っていき、そうして醜く変化した妻を恐れて逃げ帰り、途中追い付かれ、口論の果てに離縁する場所とされている。だがここでは、愛し合う死者と生者を結び付けるところだ。あるいは、あの世とこの世の間で迷っている者がたどり着くところ。仕事が忙しく一人で悩んだ妻に息子と心中されてしまったという過去を持つ男。男はここを拠点にタクシーを走らせ、待っている。そう、愛する者たちが乗ってくるのを。そのタクシーに乗って三人がどこへ行くかは読み手に委ねられている。あの世か、この世か。妻が伊邪那美尊のように、まだ来るな、来てはいけないと、男を黄泉比良坂に留めていた場所は、いずれにしても生半可な所であるはずがない。

「河林賞」を受賞した紺野夏子氏の「鴉」は、他人には絶対に理解することが不可能な、その夫婦だけの独特の関係性が描かれた作品だ。母と別れた父を思い、主人公である娘が鴉と敵対する様子が、人間同士の戦いのごとく生々しく描かれている。家族との繊細な関係、例えば嫌っていた父の作った家具に兄がこだわる場面などは、父への隠れた思いと共に丁寧に描かれ、痛々しさが伝わる。鴉は使者のように不穏な言葉を主人公に告げる。家族でも、いや家族であるが故に介入してはならない領域の存在を黒い羽根で警告するのだ。

他の候補作も読みごたえのある作品が続いた。

天野いずみ氏の「夢で逢いましょう」では、夢の中で起きていることがぼんやりと立ち現れ現実を侵食していく。逃避のように、若い恋の記憶をなぞる夢にのめり込んでいく。現実への一歩を踏み出すラストが素敵だ。

若栗清子氏の「村上君と優のこと」は、ロシアルーツの村上君が光りながら小説に登場する冒頭に、神話的な物語性を感じる。本作が書かれたのはロシアによるウクライナ進攻の前と察しつつも、今であれば異なる形での展開の可能性もあり得ると注目した。また、主人公が村上君の母親を助け、寄り添うところには共感する。

萩野央氏の「サイクロイド」は、最も難解であり、一般的な読者には少々読みにくさが残るだろう。主人公は、「不完全」な家族を完全にするために、この「円」すなわちサイクロイドを重ねているようで、実はこんな円自体、本当は不要なのだと、叫んでいるのかもしれない。閉じられた円環は美しいかもしれないが、〈無言〉だと作品は告げる。

木山葉子氏の「水水母」では、夫が処分することの出来ない千通もの女子高生からの手紙が、潮が引いた砂浜に数多に広がる水水母に重なった。水水母は死んでいるようにも生きているようにも見えるが、過去の手紙もそうである。だから、「ぶちまける」のだ。

選考会が終わると、まだまだ夏はこれからなのに、一瞬涼しい風が吹いた気がした。

第16回まほろば賞選考会風景　2022.7.17 大田区民プラザ会議室で

まほろば賞「光復香港」鈴木友範

まほろば賞　受賞の言葉　鈴木友範

この度は「まほろば賞」に選出して頂き、ありがとうございます。

仕事を言い訳にして筆を折り、更に自費出版した本を眺めて悦に入るという形で見切りをつけていましたが、しかし、もっと書きたいという思いが突き上がり、数年前から再び原稿に向かって半年に一作を目標にして頑張ってきました。ただ、特にコロナパンデミックのせいで合評会の開催もままならず、先輩諸氏の指導も頂けないという制約のある日々に苛立っていた最中の朗報でした。

仕事柄、異なる国々の歴史や文化を見聞き出来たことは幸いでした。当然にも香港現地で目の当たりにした「一国二制度」を巡る鬩ぎ合いは、私もまた書かずにいられませんでした。今後も香港を一つのテーマにしていくつもりです。

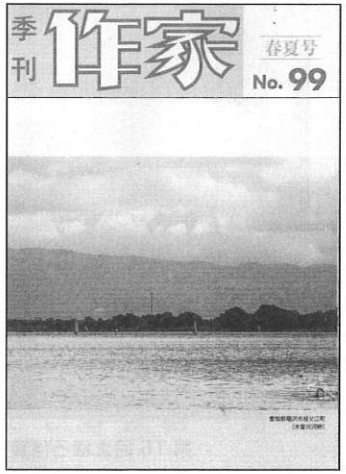
一方で受賞ということを意識せず、書きたいものを書くという原点に戻り、表現者としてさらなる高みを目指そうと決意を新たにしているところです。

あらためて感謝申し上げます。

鈴木友範

すずき　とものり

1948 岐阜県下呂市生まれ
73 岐阜大学農学部卒業
89 ファインアンドソフトテクノロジー株式会社設立
代表取締役就任
2003 自費出版「愛惜の炎」刊行
05「季刊作家」同人
21 小島信夫文学賞県知事賞受賞



まほろば賞「『よもつ耶』～更待月のこと」海邦智子

海邦智子

みくに　ともこ

1962　函館生まれ
83 北海道武蔵女子短期大学卒業
83 以後㈱札幌ツーリスト、近畿日本ツーリスト㈱、㈱ＨＫワークス、㈱秋吉などに勤務
2004 札幌文学会同人
05 北海道鉄道文学会同人
現在専門学校在学
「愛しき人」で第９回鉄道文学大賞優秀賞受賞

まほろば賞　受賞の言葉　海邦智子

このたびの『まほろば賞』受賞の一報をいただいた時、思わず驚きの声が脳天から突き抜け、歓喜の後の余韻が眠りにつくまで私を包んでくれました。全国の多くの同人雑誌作品の中から優秀作に選出していただいた時点で札幌文学会同人として代表の田中和夫氏、編集人の坂本順子氏に少しは恩返しができたと思っておりましたが、今度こそ本当の恩返しができた思いです。私の創作活動は四十歳で会社を辞めて地元新聞社の文化センター『初めての文章教室』からでした。そこで講師であった田中氏に教えを乞い札幌文学会に入会させていただき、諸先輩からの厳しいお声に励まされて今に至ります。十代の頃から友人たちや家族と一緒に過ごすよりも独りの時間が大好きで自身の内面と外面の乖離に途方に暮れたこともありましたが、創作の世界に出会い、今、私は心のままに自由に泳いでいます。私の世界に登場する者たちは全てが愛おしい存在であり、時として主人公になります。今作の主人公も前作『孤灯の下』での登場は『よもつ耶』の住人の一人にしかすぎず、登場は一行にも及びませんでした。そんな〝彼〟が、私を『まほろば賞』まで導いてくれました。今回の受賞を励みに泳ぎの手を止めることなく、札幌文学会と共に海邦智子の世界を創り上げてゆきたいと思います。

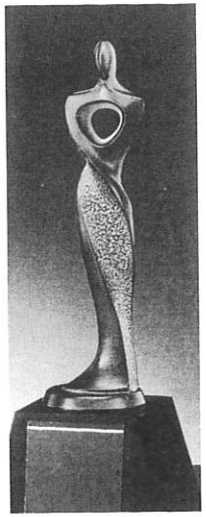
貴協会並びに貴誌の益々のご発展をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

河林満賞『鴉』紺野夏子

紺野夏子

こんの　なつこ

1949　佐賀県佐賀市生まれ
九州大学医学部付属看護学校卒
現在は福岡県福岡市に在住
「百日の記」で中上紀賞受賞
同人誌「南風」編集人



河林満賞　受賞の言葉　紺野夏子

まず、選者の皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。

あらためて河林満さんの経歴を確かめ、私がその名を冠した賞を頂くにふさわしい者かと考えました。公務員として生計を立てながら創作活動を続け、文学史に残る作品を生み出した方と、平凡な一主婦として家庭を維持し、子育てが終わったころからようやく執筆活動を始めた自分が、どうにも繋がらないのです。

ただ、「私の文学世界」に記されている、「小説にはいい小説と悪い小説があるに過ぎない。自分に切実なものを書くことによって乏しい才能も開かれていく」という、ご意見には深く納得し励まされました。この言葉を胸に刻んでこれからも精進して参りたいと思います。

河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしてきましたが、銀華文学賞の一時中断以後まほろば賞のなかに移されることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金十万円が授与されます。（二〇二一年改訂）

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮

※まほろば賞は文学を愛好する皆様からの御寄付によって成り立っております。皆様の御支援を切にお願いするしだいです。

読者賞「夢で逢いましょう」天野いずみ

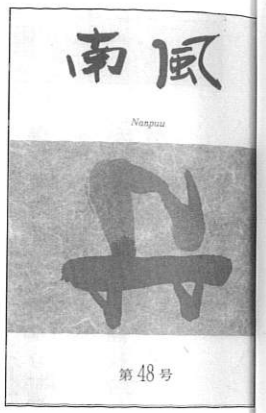
天野いずみ

あまの　いずみ

1953　富山県高岡市生まれ
77　立教大学理学部卒業
2010　文芸同人誌「朝」に入会
現在に至る　東京都杉並区在住

読者賞　受賞の言葉　天野いずみ

書いていてふと疑問に思うのは、同人雑誌に載った自分の作品が、同人や友人以外に読まれているのだろうかということです。今回、全国同人雑誌評に取り上げていただき、その上「読者賞」までいただけると聞き、選考委員の方々はじめ、全国の『文芸思潮』読者の皆様に読んでもらえたことがわかりました。手応えのある、これほどうれしいことはありません。今後もっと言葉を磨き、その言葉が人々の元に届くよう、さらに精進して参ります。この度はありがとうございました。



読者賞について　読者から持ち点制の感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ります。今回は投票金合計金額は66000円となりました。これを得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。

全国同人雑誌振興会

第16回 まほろば賞 読者賞 投票集計

●読者賞への御投票と賞金をお送り下さり、まことにありがとうございました。読者賞は下のような結果となりましたので、ここに詳細をご報告させていただきます。

作品名 投票者	村上君と優のこと	鴉	サイクロイド	水水母	『よもつ耶』～更待月のこと	夢で逢いましょう	光復香港
木内是壽					100		
今田真理子	9	9					
山田真己乃					10		10
渡辺恵理						50	
西田宏明			10				50
和田信子		50					
夏目由美				27		80	
外山寛子	20						
宮脇永子		30					
渡辺　聡						120	
志村　譲						10	20
寒河江仁			10			19	
山田まさ子	1	15		3		1	
木村弥一		16					
計	30	120	20	30	110	280	80

各作品寸評

●「よもつ耶…」は、独特な感性が光っています。「光復香港」は二二六Pに書かれている「僕らの頃は民族自決と独立を掲げることが正義で……」という文に、当時のことに疎い私は「そうだったのか！」と頭を打たれた気持ちになりました。（山田真己乃）

●海邦氏の「よもつ耶…」は男の人生を語る細かい描写のうまさに引き込まれた。（木内是壽）

●「村上君と優のこと」はさわやかな気持ちになれてよかった。「鴉」は人生の終末が象徴的に書かれていて、胸に残る。どれもみんなよかった。（今田真理子）

●「夢で逢いましょう」は、わかりやすい文章で一見平明だが、よく鍛えられた極上の文章で、何度でも読み返せる光沢がある。さりげない、自然な日常の中に胸に残るものがある。（渡辺聡）

●「光復香港」は全共闘世代の、残すべき記録。現在もアジアで渦巻く民主化運動と共鳴するものがある。胸に響いてきた。（西田宏明）

●「夢で逢いましょう」には、懐かしさがある。初恋の中に滑り込んでくる死が、人生の儚さを浮かび上がらせて、高校時代のかけがえのない何かが、煌めきをもって戻ってくる。（渡辺恵理）

作品感想――二〇二二年まほろば賞読者賞はこう投票した

●よい作品が多く、投票に苦労した。

まず「光復香港」は0点とした。

これは全く読者賞にふさわしくない。圧倒的実力を持ち、まほろば賞に必ずや輝く作品だからである。斬新な着眼点があること、現代性、この点において「光復香港」これをおいて他にまほろば賞があるだろうか。

香港のデモとともに、かつての日本での学生運動の頃のデモが語られる。

中国の共産党に信頼を寄せていたことが少しだけ語られているが、こんな数行を読むと私たちの世代はそんな先輩たちを知っているので胸が痛い。中国の共産党は違う、その熱心な信じきった言葉を今でも思い出す。そういう思い出に触れてくる作品である。主人公と同じく留置場に入れられた先輩方を思い出した。あと、作中の刑事さん、太い万年筆を持っているのが印象的だった。今は取り調べはボールペンである。叩き上げの刑事さんから見るとデモをする学生さんは理想的すぎて敵意を持ったと語られている。読みながら、刑事の節くれだった指と万年筆が眼に浮かぶような気がした。「光復香港」と隣のページに自分の作品が並んだりしたら、きっと霞んでしまう。

「鴉」――次にまほろば賞の本賞に近い位置にいるのは「鴉」である。かつて自分を捨てた父親、機能不全家族とともに老いや介護の問題が横たわっている。これも今日的なテーマといえよう。

紺野氏は文章力のある上手い人で、最後のシーン、カラスが鮮烈なイメージを残している。私はこの作品は非常に勉強させて頂いた。短編小説はかくあるべしというような典型的な作品である。「光復香港」がなければ一位になれたと思う。

「よもつ耶～更待月のこと」――これは幻想的なオムニバス作品で、銀河鉄道を思い出した。作者は鉄道の好きな人のようだ。詩的なので好き嫌いが分かれる作品だと思う。

「サイクロイド」――教養人としての作者の立ち位置が透けて見える。技術的には「」が多いのが気になる。

またわたしは自分が障害手帳2級のせいか、障害者がテーマとなる作品には逆に辛めになるということもある。なぜ円環にしなければならないのか、生きることを美しく円にするのか、なぜ？　ギザギザじゃダメなのか。

しかし一方では障害者家族の問題提起をしたということで採点を高くする人もいるであろうと思う。哲学的な点で好む人がいてもおかしくない。

「水水母」――惜しいところのある作品である。

古い手紙に綴られた、高校時代から続く人間関係に嫉妬するという話である。

女の情念をとらえた作品は今回の応募の中ではこの作品だけである。私は女の情念が描かれた作品が好きなので大変に好みなんだが、そして作者はわが故郷の高知女子大学卒業、採点を高くつけたいと思う。

ただ惜しむらくはラストシーンである。なぜ別れた夫に、

今からでも遅くはないなどと思うのか。元夫と心ゆくまでなぜ話したいのか。高校時代の同級生の女をいつまでも引きずっているような男ではないか。そんな男とっとと忘れなさい。そうヒロインにアドバイスしたくなる。

ずるずると断ち切れない人間の思いの象徴として水水母が登場する。絵里子が自分の人生を生きるためには、水クラゲを包丁で突き刺すべきではないか。

未練な、しかしこんな女もまだいることは確かだ。要領の悪い妹のような絵里子への励ましを込めてのポイントとしたい。

「夢で逢いましょう」——懐かしい青春の香りのする作品である。淡い初恋に近いような男の子との想い出に好感が持てる。男の子の膝のところはよく描けていると思う。星空のシーンも良い。

細かい点では、最初のシーンに夢の後、ヒロインの下着を濡れていたとしたほうがいいと思う。より官能的な気がする。ただこの男の子との関係を大変に淡くしたいというのであれば下着が濡れていない現在の形の方が正解となる。でも湿っていたとでもした方が、微妙な感じが出るのではないか。こういうシーンは作者の体験とは無関係に、作品全体にどう響くかを考えてほしい。

「村上くんと優のこと」——良い作品だが、冒頭の方でつまずいた。気になったのは6行目、光をまとった白い少年という言いまわし。一瞬SF小説かと思って読み直してしまった。すぐにこの少年がロシアの少年で金髪の子だということがわかるのだが、6行目でこの「光をまとった」と出てくると、読者は混乱する。光というのはやや宗教的にも取れる表現であるから、何か他の表現にしたほうがよかったと思う。もちろん同じ表現でも途中に出てくるのは構わない。最初の方なので驚いたというだけに過ぎないのだから。他の所には全く問題はなく、うまい人だと思う。全体にパステル画のような印象を抱かせる。

人種問題も、いじめの問題も、こういう風に甘やかには解決しないと思う。人の良い学生に理解力のある先生、この物語の設定は多分夢に過ぎない。でもそんな夢も見ていいだろう。作品が全てリアルでなければならないという事はないと思うので、ポイントを入れることにした。

ノーマン・ロックウェルの絵のように夢を語ってもいい、そう読んだ。

七作品の彩りゆたかに

猛暑に耐えかね、カフェにこもって文芸思潮に読みふけった。七作の彩り弁当を食べたような気分だ。

一作ごとに作品に話しかけるようにして読んでいく。この一行が気に入らないとハラを立てたり、逆に胸に染みて涙ぐんだり。まさに泣いたり笑ったりの時間を過ごさせてもらった。

来年もまほろば読者賞に参加したい。応募作タイトルに重ねて申し上げる。花束みたいな作品たち、文芸思潮で会いましょう。

（山田まさ子）

同人雑誌優秀作

朝

42号

夢で逢いましょう

天野いずみ

あまりの心地よさに眠りから覚めた。長い余韻の途中だった。

毛布に包まれて横になっていた。顔を出して辺りをうかがうと、薄暗い部屋の中だ。足の先には整理ダンスがあって、左側にはカーテン、右には低いテーブルがすぐそこまで迫っている。なんだ、私の部屋だ。夢だったのだ。

夢の中で男と交わっていた。手をつないで人の群れから逃れ、窓がいくつもある部屋で裸になって抱き合った。いきさつや行為のすべてはもう切れ切れにしか思い出せないけれど、頂点に達し、その後の余韻に浸っていたことは確かだ。

夢の中で感じるのは初めてだった。その快感がすさまじかったので、実際にこの身体が反応しているのか知りたくて、下着にそっと手を入れてみた。何の変化もみられなかった。そうか、夢の出来事は夢の中だけで繰り広げられているのだ。夢の「私」が感じても、目覚めた私の肉体とは直接繋がっていないのだ、きっと。

相手は誰だったのだろう。どこかで会ったことがあるような、ないような人。厚い胸板に筋肉質のたくましい腕と太腿で、私を包み込んでしまえるほど大きな人だった。首から上に雲がかかっているみたいで顔がどうしても思い出せない。

でも、夢の中ではよくあることだ。いつの間にか顔や身体が入れ替わっていたり、場面が脈絡もなく飛んでしまったり、自然法則が自由自在に変わったりもするのだから。

そういえば、夢の中で家族と交わったことがある。最初に父親に抱かれたときは、さすがに目覚めが悪かった。近親相姦のようなことがなぜ夢で行われたのか、精神が病んでいるように感じられてひどく動揺した。その後、母親とも裸で抱き合った。同性との、しかも父に続いての行為だったから、またしても衝撃を受けた。人に話すこともできず、不安をそっと隠しもっていた。

両親は私が社会人になってから数年して、相次いで病気で亡くなった。学生の頃は反抗的な態度をとることが多かったし、卒業後すぐに家を出て一人暮らしを始めたので、後悔の念や、話しかけたいという恋しい気持ちが夢に現れるのかもしれないと考えたりした。

ただ、両親だけでなく、兄にも夢の中で抱かれた。兄は今も生きているし、暮らしは別々だが普通の兄妹の関係を保っているつもりなので、心理学や精神医学的に何らかの意味があるにしても、夢の中の出来事は突拍子もなくて、いつも驚かされるばかりだ。

それにしても心地よさが続いている。再び眠りに落ちそうな中で、ちょうどよい暖かさに身体が包まれているのは、ホットカーペットのせいだと気が付いた。

最近は布団の上げ下ろしさえ面倒で、カーペットに昼寝用の薄い敷物を敷き、その上に毛布だけを掛けて寝ている。枕は座布団で代用、部屋着のままでパジャマにも着替えない。手足を動かすことがだるくて仕方ない。

仕事を終えアパートに帰ってからは、ホットカーペットに直に座り、膝に毛布を掛けて過ごしている。トイレに立ち上がる以外はテーブルの前でほぼ全てをこなす。電気ケトルで湯を沸かし、インスタントコーヒーやティーバッグで水分を補いつつ、夕食は出来合いの弁当や菓子を広げる。本当は口を動かすことさえ面倒だ。ゴミは手を伸ばしてテーブル脇のゴミ箱に投入する。

テーブルの上にはノートパソコンや卓上カレンダー、ティッシュケースにペン立て、ほこりをかぶった紙類などがひしめいている。リモコンでテレビを点けてからは夜中まで付けっぱなし。スマートフォンにはニュースサイトの情報や広告メールが届くだけで、SNSにもゲームにもまったく興味が持てない。そういえばここ数か月、知り合いからのメールも電話もない。

洋服をいちいち脱ぎ着するのも煩わしくて風呂に毎日は入らない。さすがに食後の歯磨きだけはするけれど、一日の終わりはホットカーペット上を毛布と共に五十センチほど移動し、温度を低めに調整して、そのまま横になるだけだ。

朝になれば不幸なことに自然と目が覚めるので、コー

ヒーを飲み、着替えて簡単に化粧して、仕方なく会社へ向かう。そういう生活がしばらく続いている。

数か月前に、十年ほど所属した食品会社の店舗販売部から、本社の企画開発室に異動が決まったときは、希望が叶ったと喜んだものだ。三十五歳の誕生日を迎える前日だった。安月給の小さな会社ではあるけれど、私はスーツを新調し、大きめの革のバッグを買い、チークの色を明るめに変えて出勤した。新規企画の準備のために商品のアイデアを考えたり、他社製品の現物や資料を取り寄せて調べたりもした。意欲や期待で気分は絶好調だった。

だけれど、社長の友人だという入社したての上司からは何の指示もなかった。担当する企画は社長直属の案件だから、社長本人からアイデアや指示が下りるまで待つようにと言う。肝心の社長はたまにやって来て、上司と長い時間話して帰っていくが、仕事に進捗はない。次第に手持ち無沙汰の時間が増える。何をしたらいいかと他のメンバーに相談しても、社長案件のことはわからないと、つれない態度を取られるだけだった。

彼らはいくつかのプロジェクトを兼務しているので、毎日、マーケティング調査だ、営業部との打ち合わせだ、デザイナーと面会だと部屋を出たり入ったり忙しそうだ。従来の部員たちの動きを背中に感じながら、専任である新米の上司と私だけが、オフィスの片隅で固まっていた。

ほぼものを言わない日々。パソコンの前に座って、手を動かす振りだけの時間。振りをしながら、これは私を辞めさせるための会社の陰謀ではないかと疑った。疑い出すときりがない。常に監視され、家まで尾行がついているのだと妄想は膨らんだ。

上昇中のジェットコースターから、ピークもないまま急降下の真っ最中。トイレにこもる時間や、非常階段や屋上に出て空を眺める回数が世界一多い、ギネス級会社員に違いなかった。

仕事はないのに、しなければならないと気持ちは焦る。家でなら何かできるかもしれないと、自分で集めた分厚い資料を持ち帰る。だが結局、テレビ映像を終了まで垂れ流して、最後に床に寝転がるだけの毎日が過ぎていく。カーペットの熱だけが、この世の出来事を忘れさせ、眠りへと誘ってくれるたったひとつの慰めだった。

満員電車に詰め込まれ、今日も線路の上を運ばれる。つり革の揺れに身を任せながら、窓に流れる景色をやり過ごす。

前に座っている男のスマートフォンが手元から滑り落ちたようで鈍い音がした。「すみません」と私に言って、足元に落ちたスマホを拾い、男が体制を元に戻そうとしたときだった。垂れた前髪を頭を振って横分けに直そうとする仕草に、つい最近どこかで見た光景だと頭が回転し始めた。

どこでだろう。いつのことだったろう。同じように誰かの髪が揺れていた。記憶の欠片。それも重要な、何か。だけれど、思い出せない。目をつぶって、欠片に刻まれた情景を探す。もう少しでたどり着きそうなのに、たどり着けない。早くしないと、欠片さえ粉々に散ってしまう。

ある日電車の中で、隣に座った人のスカート生地に堪らない懐かしさを覚え、触れてみたい衝動を必死に押さえたことがあった。水色の、柔らかい肌合いの布地。同色の似た布地と共に、いつか、どこかに私はいた。たぐり寄せようと、記憶の川をさかのぼる。プリーツスカートの裾に小さな花の刺繍があった。ウエストの切りかえ線、レースの白い襟、半袖のワンピース。あれは小学生のときだ。母が縫ってくれた優しい色の服を、早くみんなに見せたくて校庭を駆けていた。

公園を散歩しているときも、記憶の欠片がよく落ちてくる。木洩れ日が地面や、前を歩く人の肩に揺らいでいるのを見て、同じような模様がどこかにあったはずだと探し回った。家の障子に映った木の葉の影だったか、海水浴帰りの夕日を映した波の揺らぎだったか、淡い思い出は歩を進めるうちにいつの間にか消えていたりするけれども。

乗り換えのために電車を降りた。ホームも通路も階段も、駅構内は通勤客であふれかえっている。足元を見ながら慎重に階段を上っていたら、前を行く人の白い靴下が見え隠れするのが気になった。

あのさ、革靴を履くサラリーマンなら、普通はもっと薄手の黒っぽい靴下を履くものでしょ。しかもズボンの丈が短かすぎだし、シワの寄りすぎでよれよれじゃない。通勤服にもっと気を遣ったらどうなのよと、自分のことは棚に上げてつっこんでいたら、男の白い靴下から、高校時代の制服姿に思いが飛んだ。

男子は黒の詰襟学生服の上下だった。靴は革靴だったか、スニーカーだったか忘れたが、白い靴下を履いていた生徒が多かったと思う。女子はブレザーにプリーツスカートの組み合わせ。おしゃれなチェック柄のスカートなどなかったから、オーソドックスな紺の上下に、足元は白のソックスに黒のローファーだった。スカートの丈を少し縮めたり、ワンポイント刺繍の入っているハイソックスを履いたりして、それなりの工夫をしていた。

制服を思い出しているうちに、三階建ての校舎の外観が浮かび、その一室で、クラスメートたちが授業を受けている映像が現れた。私は後ろの方から教師の顔や、みんなの頭をぼんやり眺めている。

そういえば、二年生か三年生のとき、教室の一番後ろの席に座っていた吉岡くんも、白い木綿の靴下を履いていた。色白の彼はウエーブした髪を横分けにして、前髪は片方の目が隠れるぐらいに伸ばしていた。ときどき、手で掻き上

げたり、頭を振って乱れた髪を直したりした。

席替えがあるまでの長い間、吉岡くんは私の後ろの席にいたと思う。二人とも授業中に自ら発言することはなく、休み時間に級友と話すこともなく、お互い黙って前後に並ぶだけの関係だった。ただ一度だけ、大声で笑い合ったことがあった。

そうだ、思い出してきた。彼はいつも静かに微笑んでいるだけで、何を考えているのかわからない、ちょっと薄気味悪い存在でもあった。私も同類の生徒だったから、今から思えば、彼の中に自分を見るようで、あまり話したいと思えなかったのだ。

彼の兄が当時ロックバンドを組んでいたことは有名で、派手で活動的な兄とよく比較されていた。それで一度は話題になるのだが、すぐに忘れられた。兄と似て背が高く、身体はがっちりしていたけれど、吉岡くんは楽器を扱うわけでもなく、スポーツ部に所属して活躍するわけでもなく、成績が特に優秀なわけでもない。気が付くと教室にいるけれど、いてもいなくても気付かれないタイプの人だった。

それでも、たまに後ろを振り返り何か尋ねれば、小さな声で真剣に答えてくれた。伏し目がちに微笑むときの口元が美形で、古い時代に作られた仏像のようだったと今になって思う。

顔の輪郭や目鼻立ちが何となく思い浮かんだところで、昨晩見た夢を思い出した。私を抱いた男はひょっとしたら、吉岡くんではないのか。筋肉質な体つきが似ているし、それより何より、私に触れた長くて繊細な指は吉岡くんのものに違いない。振り返ったとき、机に乗った彼のきれいな指を見て、つい自分の手を隠したぐらいだ。関節の膨らみも、爪の形もよく覚えている。

そうか、二人が結ばれた部屋は、夢の教室だったのだ。薄茶色の机と椅子が隅に乱雑に積み重なっていたのを思い出した。だけれど、彼となぜあんな行為に及んだのか見当もつかなかった。

駅の階段を登り切ったところで、夢の彼は吉岡くんで間違いないと確信した。そこで一瞬立ち止まったのがいけなかった。後ろの人にかかとを踏まれてパンプスが脱げてしまったのだ。片足でバランスを取っている状態で次から次へと背中を押され、危うく押し倒されるところだった。

一段下に落ちた靴を拾うために向きを変え、しゃがんで手を伸ばす。黒い大群が階段をぐんぐんせり上がってくる。冷たい視線と舌打ちと、まともに正面からぶつかってくる通勤客に抗しながら、どうにかこうにか靴を拾い、中に足を収めることができた。通勤途中なのに、もう疲労困憊して涙が出そうだった。

校門を入ると、正面に丸く囲われた花壇があり、四季折々

の花や常緑の高木、手入れの行き届いた低木が植わっていた。右回りか左回りで進んだその奥が、県立桐山高校の正面玄関である。花壇の手前を左に折れて少し歩けば、広くも狭くもないグラウンドが目の前に広がる。そのすぐ右側に生徒たちの昇降口があった。

靴を履き替え、廊下を左にまっすぐ進む。突き当たりに幅広い階段があって、三階まで上った手前から三つ目が私たちの教室だ。浅黄色の引き戸を開けて中に入ると、ガラス窓から部屋に光が降り注いでいる。左側には生徒たちの机と椅子が整然と並び、右側の教壇との間をすり抜けてベランダへ出れば、花壇やベンチが配置された中庭が見下ろせた。その中庭に面して、体育系の小屋のような部室が建っていた。

高校時代、私はテニス部に所属していた。はじめは書道部に入部したのだが、部員の優秀な作品を目の当たりにして居づらく感じたのと、墨の匂いで息苦しい屋根の下ではなく、空の下で思い切り身体を動かす方が自分に合っていると考え直したからだった。

運動部を見学した末、部員が多く練習が緩そうなテニス部に入部を決めた。本音は白いプリーツのスコートと、レースのアンダースコートを身につけて、コート内を走ってみたかったからかもしれない。その割に運動神経はいい方とはいえず、私の短かめの足では、バウンドして弾むボールになかなか追いつけなかった。試合に出られない私は、素振り練習とボール拾いばかり。それでもかまわなかった。

もう一つの理由があった。テニスコートの隣にバレーボール部のコートがあって、憧れの上級生、川口さんが華麗な手さばきでパスしたり、レシーブやスパイクの練習をしていたからだ。彼は春の県大会で、チームを準優勝に導いたバレー部のキャプテンでもあった。

少し離れたところから彼を探し出し、盗み見するのが堪らない。すらりと伸びた手足に、涼しげな目元。スパイクするときの鞭のようにしなる背中や右腕。ジャンプした後の軽やかな着地。先輩は白いボールを追って、上下左右に躍動した。

同じ部活動ではなく、隣のコートにいるというのがよかった。バレー部はときどき体育館を使用するので会えない日もあった。今日は会えるか、会えないか。放課後の胸が騒ぐ時間があったから、眠気を誘う午後の授業にも、ひとりぼっちの休み時間にも耐えることができたのだと思う。

ラリーの順番が回ってきた。今日こそ、集中して長く続けたい。相手は女子部の部長、京子先輩。

「お願いしまぁす」

ラケットを構えて腰を落とす。京子先輩はボールを高く空中に投げ上げる。ラケットが振り下ろされて緩いサーブがやってくる。

いぃち、にぃい、さぁん、しぃい、ごぉお、調子いいかも。ろぉく、なぁ「あぁ」。

打ち損じて、テニスボールが隣のコートへ飛んでいく。私も飛んでいって追いかける。

「すみませぇん」

高く手を挙げてお辞儀をした。転がるボールに気付いた川口さんは大きな手ですくい取り、玉をいったん身体に引きつけてから、手首のスナップをきかせて前へ放る。ボールは放物線を描いてふんわりワンバウンド。それから私の手にすっぽり収まった。手首のスナップは今日もしなやかだった。

「ありがとうございまぁす」

川口先輩が私を見て微笑んでいる。その視線が少し、下がった。私はスコートから出した足を軽く交差させた。

風が吹いた。柔らかい髪の毛が舞い上がり、前髪が目元まで落ちた。先輩はゆっくりと髪の毛を掻き上げる。なんて優雅な動作だろう。外国映画で見た、青い目の俳優の動きに似ていた。

「何してんの、ゆり子。早く戻ってぇ」

テニスコートからキャプテンの声が届く。

しまった。ラリーの途中だった。

「はぁい」

走って戻ろうとするのだが、シューズが地面に張り付いたみたいに動かない。どうしても一歩が踏み出せない。仕方なく京子先輩にボールを放り投げて、身体をくるりとバレーコートの方へ戻した。

「あれ」

よく見れば、コートにいるのは川口さんではなく、吉岡くんではないか。前髪が垂れた額に、白くて彫りの深い目鼻立ち。

「それっ」

吉岡くんが空に向かって高いトスを上げた。ひとりが後ろから走ってきて、ネット越しに豪快なスパイクを打ち込んだ。ブロックしようと待ち構えるいくつもの手をすり抜けて、ボールは向こう側で大きくバウンドした。

「ナイスキール」

ボールの行方を追う吉岡くんの、白い歯と白い体操着に午後の光が反射する。見上げれば青い空が広がっていた。

そういえば、同級生の男子バレー部員は入部してまもなく、コーチだか顧問の先生と揉め事があって、全員が早々に退部したと聞いたことがある。吉岡くんはもしかしたら、そのときのメンバーだったのかもしれない。

ふっと気付くと、屋外のバレーコートから、閉じられた空間に移動している。誰かが荒い息をしている。右側には低い物体、足の先には四角い箱、左に高くそびえる壁らしきもの。どうやら私が、部屋の片隅で毛布一枚かぶって横

たわっているようだ。

今まで夢を見ていたのか、夢に見たことを思い出していたのか、遠い記憶をなぞっていたのか、覚醒仕切れない意識があちらこちらをさ迷っている。身体だけは、ぽかぽかと暖かかった。

休み時間、教室の前方から、机に腰掛けた級友たちの話し声や笑い声が響いている。何を話しているのか知りたくて耳を傾けた。でも、よく聞こえない。私は家にあった新書を広げて読む振りをしている。題名も内容も覚えていないが、男子も女子も白い半袖シャツを着ていたから、たぶん、六月か七月頃だったのだろう。私は本を閉じ、ため息をついてから窓の方を見た。それから両手を背もたれの後ろに下ろした。

左手に何かが触れた。何だろう。気になる。手を引っ込めてから、もう一度左手を垂らし、左右に小さく動かしてみた。やはり、ある。固そうで柔らかなもの。手を机に戻して考える。何かがあるとして、何が考えられるだろう。全然、思いつかない。でも、気になる。正体をつかむためにもう一回、手を下ろしてみた。

触れた。触れたぞ。つかめそうだ。よし、つかんでやれ。私は思い切って、そのものをつかんだ。

「ぎゃ」

後ろから声がした。はっとして振り返ると、吉岡くんの左足のすねをしっかりと握っていた。

「わっ、ごめんなさい」

顔が熱くなった。彼は背が高く足も長いので、椅子を後ろに引いて座っていることが多かった。その日は、机からはみ出した足が大胆に私のところまで伸びていたのだ。

「いいよ」

吉岡くんははにかみ、下を向いた。

よくわからないけれど、ふつふつと笑いが込み上げる。

「ふふふ」

「くくくく」

「ははははは」

腹にだんだん力が入ってくる。声も合わせて高くなる。私につられて、吉岡くんも笑い出した。

「はっ、はっ、はっ、おっかしい」

腹を抱えて笑った。お互いの顔を見れば見るほどおかしくて、しばらく大笑いは止まらなかった。

クラスメートが私たちの方を振り返り、あきれた様子で見ていた。クラスで一番静かでおとなしい男子と女子が声を上げて笑っているのだから、不可解な光景だっただろう。

あのとき、吉岡くんは白い靴下を履いていた。ズボンがずり上がってあらわになったすね毛の部分を、私はこの手でつかんだのだった。骨にひっ付いた、弾力ある肉の感触をぼんやりと覚えている。

それからは、吉岡くんが後ろに座っていることを前よりも意識した。高校時代も風呂に入ることが嫌いで、週に何回入浴していたか、何日おきにシャンプーしていたか思い出せないが、そのとき以来回数が増えた気がする。リンスも使うようになったと思う。広がりすぎるくせ毛を念入りにとかし、後ろでひとつにまとめた。黒いゴムの上に、隣町の雑貨屋で買い求めたシュシュを巻いたのもその頃だ。

三年生の初秋だった。修学旅行の日が近づき、部屋割りや現地での行動を計画するためにグループ分けが必要となった。私には仲のいいクラスメートがいなかったから、次々と決まるグループから取り残されていた。

そんなとき、小森晶子が声を掛けてくれた。彼女は学級委員長で、男子からも女子からも慕われていた。気さくで明朗快活、授業中には率先して発言し、スポーツもできて、しかもストレートヘアの持ち主。何もかもが私と正反対だった。彼女のような私だったら、どんなに高校生活が楽しいだろうと夢想したりした。その彼女が誘ってくれたのだった。

修学旅行は三年生の希望により東北方面に決まった。首都圏からバスに乗って北上していき、帰りは新幹線で帰ってくる、五泊か六泊の旅行だった。

私は幼い頃から車酔いする質だったので、小学生の遠足に始まり、高校生になっての研修旅行まで、揺れが少ないという理由で、いつもバスの先頭座席に座らされた。今回の修学旅行でもお馴染みの席にひとりで座り、窓を口の幅に開けて外の空気を吸っていた。

バス特有の排ガスの匂いや不規則な揺れに気分が悪くなり、いつ吹き上げるかもしれない吐き気を恐れていると、いつも後方の座席から男子と女子の騒ぐ声が聞こえてきた。楽しそうでうらやましいけれど、自分の居場所はここにしかない。目的地に着くまでは、動きの遅い遠くの景色を眺めるか、早く寝入ってしまうのが一番だった。

北上しながら、どこに宿泊したか覚えていないのだが、野口英世や石川啄木記念館、裏磐梯の五色沼に寄った記憶はある。平泉の中尊寺や、盛岡では鹿踊りも見学した。移動距離が長くなるにつれて、バスの匂いや揺れに慣れてきたせいか、もうほとんど酔わなくなっていた。

五台のバスは奥東北の森林地帯を走り抜けていく。ちょうど紅葉の真っ盛りで、八幡平から八甲田山にかけて、山々は錦の絨毯で覆われていた。バスがあえぎながら山を登れば、色彩はますます鮮やかに目に迫り、下れば窓から秋風が吹き込み、胸はいっぱいに膨らんだ。私はバス旅行というものを初めて満喫することができた。

途中、湿原が広がった。ときたま現れる小さな沼が群青の水を湛え、周囲の草木を映し出す。その水際に立ったなら、静けさと清らかさに、映る影を追って中に吸い込まれてしまうだろう。村の青年と乙女の、それとも青年と女神の、悲しく美しい物語があったはずだ。森の風景はいくら見ていても、どれだけ想像しても飽きることはなかった。

八甲田山では、森はついにベールを脱いだ。最高潮に達した自らの秘密をあらわにさせて、木々たちは私に頬を赤らめる。まばたきする暇なんてなかった。この瞬間を目に焼き付けてしまわなければ。この場面に立ち会うために、私は修学旅行に参加させられたのだ。

バスの中からは寝息やいびきが聞こえていた。寝不足の上、はしゃぎ疲れた彼らは何も知らずに、無邪気に座席で寝込んでいる。通路を挟んで座っている担任までが口を開けて眠っていた。独りで本当に、よかった。極上のこの景色は、私だけのものだ。

あのとき、私はひとり悦に入っていたけれど、吉岡くんもあの風景を見ていたに違いなかった。彼がどこに座っていたのか、どのグループにいたのか知らない。でも、おしゃべりするでもなく寝入るでもなく、同じように森の佇まいに息を呑み、沼の美しさにため息をついていたことだけは確かだ。今なら、それがよくわかる。

十和田湖の近くに、たぶん最後の宿があった。夕食後の自由時間、小森晶子は同じ部屋の仲間を連れて男子の部屋へ遊びにいった。声を掛けられたが断った。行っても男子と話すこともできず、居づらさを感じることがわかっていたからだ。

ひとり部屋に残って、旅行のパンフレットを眺めていた。でも、それ以上やることがない。私は外に出て、湖畔を散歩することにした。寒くはないだろうか、灯りは足元を照らしてくれるだろうか、大勢が外に出て賑やかすぎやしないか。あれこれ考えながら誰もいないフロントの前を通り、下駄箱から靴を出し、玄関のガラス戸を引いて外に出た。

「わー」

満天の星。見たことのない星の数。目眩(めまい)がする。しかも、ひとつひとつの光が強くて重そうで、今にも落ちてきそうで怖かった。何万光年、何億光年も遠くにあるなんて信じられない。今すぐにも手が届きそうだ。

幼年時代を過ごした北陸地方で、夜空に流れる天の川を私はよく見ていたと、母は言った。歩いて三十分ほどの海のことや、近くにあった山のことはしっかり覚えているのに、星のことは全然記憶になかった。だから今日、夜空を埋め尽くす星々に生まれて始めて出会ったようなものだ。

「すごいなぁ」と、ずっと上を向いて旅館前の道を下っていった。星明かりの下、舗装道路から石ころの多い通りへ、そのうち柔らかい水辺の道へと足元が変わった。

左側に大きな湖が潜んでいるのがわかる。暗さに慣れた目には、その遙か向こうに黒く連なる山々も見える。周りに誰もいない。風もない。湖岸に所々灯りはあるけれど、

進む先にはこんもりした森と、その奥に深い闇があるだけだった。

湖に吸い寄せられて、足を取られないようにしよう。深みにはまったら、冷たさに身体が凍ってしまうだろうから。森の中から動物や変質者が現れて襲いかかってきたらどうしよう。そのとき、旅館に届くぐらいの大声が出せるだろうか。「あ、あ」とちょっと声に出してみる。

今更だけど、小森晶子が部屋に戻ったとき、私がいなくて大騒ぎにならないだろうか。まさか、みんなで探しに来たりしないだろうな。「山之内さぁん」「助けに来たわよぉ」なんて、叫ばれたりしたらどうしよう。じゃあ、どこでUターンしようか。その前に、どこかに腰掛けてじっくり星を見上げたいが、ベンチさえ見つからない。歩みがだんだんと遅くなる。

そんなときだった。森の暗闇から黒いものが飛び出してきた。

「わーっ」

近づく塊に私はのけぞった。

「おれ、おれ」

いきなり腕をつかまれた。

「きゃーっ」

心臓が止まりそうだった。

「ごめん、驚かせて。吉岡だよ、吉岡」

声はどうやら本人のものだ。顔を近づけて確かめた。

「もう、やめてよ。びっくりしたぁ」

まだ心臓の音がする。

「なぁ、来いよ。こっちに最高の場所があるんだ」

腕をつかまれたまま、私は森の中へ引きずり込まれた。

少し入ったところに、樹木のない円形の空間があった。直径五、六メートルぐらいだろうか。見上げれば、星空が丸く切り取られている。濃縮された光の束が、その地上のサークルを照らしていた。向こう側におあつらえの大きな石がある。

「あそこに座ろう」

「うん」

サークルの光を横切り、石に腰を下ろした。

「きゃっ」

冷たすぎる。かじかんだ手に息を吹きかけて尻の下に差し込んだ。吉岡くんは身体を丸め、腕を組んでいる。

「こんないい場所をよく見つけられたわね」

「夕飯の前にこっそり抜け出して見つけたんだ」

「ふん、やるじゃない」

どうしてだろう、彼とだけは緊張せずに話ができた。

星空を見上げた。

森からも星が漏れ出ている。

「すごいね」

「そうだね」

星たちの瞬く音が聞こえる。

しばらく耳を傾けた。

「ねえ、吉岡くんはいつも独りで寂しくないの」

星だらけなのに変な質問。

「寂しくはない。もう慣れている。何だよ、寂しいのかよ」

顔を私に向けた。

「う、ううん」

曖昧に返事をした。

今はちっとも寂しくないし。

私は顔を上げた。

彼も空を見た。

「ねぇ、私たちはこうして星を見てるけど、私たちも宇宙に散らばる星のひとつってことよね」

「そうだよな。おれたちもそうして、星たちから見られてるんだよな」

「見られてる」

「ああ、よく見ろよ。ひとつひとつが目玉に見えてくるぞ」

星がどうして目玉なのだ。

無数の目玉。

「変な人。おかしいんじゃないの」

教室の吉岡くんと別人のようだ。

でもまぁいいか。

星がどんどん降ってきた。

星のプールに浮いている。

「星に溺れそう、なんちゃって」

「溺れるのもいいかもな」

「泳げないのよ、本当に」

「だったら助けてやるよ」

「言うじゃん」

二人のナイトプールだ。

身をゆだねて泳いでいる。

「なんだか夢の中にいるみたいね」

「誰のだよ」

誰の。

「もちろん私のよ。え、もしかしてこれは吉岡くんの夢の中なの。違う違う。星たちの夢の中、なのかもね」

みんな繋がっていたりして。

「星たちの夢か。気が遠くなりそうだな」

遠くなりかけたとき、背後で森がわずかに動いた。それとも星が傾いたのだろうか。

「おれさ、山之内さんのこと、忘れないと思うよ」

「何、それ。私、吉岡くんに何か良いことしたかしら」

「いいや、何も」

その通りだ。

私は良いことなどしたことがない。

「じゃ、どうしてよ」
「夢で会える」
確かそう言った。
「え」
「いや、何でもない。ここに一緒にいられたからさ。もうしっかり目に焼き付けたよ」
後ろの席から囁かれているみたいでくすぐったかった。
「ここに一緒にいただけで」
「そう。おかしいか」
「じゃ、もし私以外の人がここを通ったら、その人にも同じことを言ったんじゃないの。案外、隅に置けない人だったりして」
何てつまらないことを言ったのだろう。
「違うよ。山之内さんがここにひとりで来ること、わかっていた」
「どうして」
星たちが煌めく。
「決まっていたんだ」
「もう、何言ってんだか」
声は星空に漂う。
「私も吉岡くんのこと、忘れないと思う。吉岡くんのすねを思いっきりつかんじゃったものね。あのときはすっごく恥ずかしかった。でもいい感触だったよ」

その後、何を話したか覚えていない。肩を寄せ合ったか、キスをしたかも記憶にない。でもキスをしていたら、ファーストキスのはずだから、ことあるごとにこの夜のことを思い出したことだろう。だから、そのまま宿に帰ったのだと思う。
どうしてこの日の出来事を忘れていたのかわからない。都会でも見上げれば星のひとつやふたつは見えるのに、思い出そうにも思い出の欠片(かけら)さえ見いだせなかった。
「あ」
という間に星が流れて、森に消えた。
「あの輝く星のすぐ隣に、赤い星があるだろ。名前、知ってるか」
吉岡くんが星を指差して言った。星座なら多少わかるけれど、あんな小さな星の名前を知るはずがない。
「何て言うの」
「コキイジュビアル。またの名を……」

吉岡くんと交わる夢を見て、小さな波が立った一週間後ぐらいに、また彼が夢に現れた。
桐山高校の近くには大きな川が流れていて、遠回りになるけれど、川沿いの土手を歩いて駅へ向かう通学路もあった。夢の中で、その土手を制服姿の吉岡くんと私が歩いている。夕日にきらめく川面を、近くの大学のボート部がオー

ルを漕いで滑っていった。
成長してズボンの丈が短くなり、白い靴下がさらに目立つ吉岡くんと、未だに大きめのブレザーを着ている私の、背丈が二十センチ以上違うコンビが黙って駅を目指している。本当は高校生のとき、バレー部の川口先輩と、一度でいいから並んで登下校したいと夢想した土手だった。
二度目の夢を見たその日、相変わらず仕事のない仕事に疲れて家に帰ると、郵便受けに桐山高校クラス会の案内状が届いていた。何という偶然だろう。私には予知夢の能力があるのではないかと、はがきを持つ手がちょっとだけ震えた。
往復はがきの往信には、来年一月中旬に、新年会を兼ねてクラス会を開催する旨が書いてある。余白に、「今度はぜひ来てね。待ってます。晶子」と青いボールペンで記してあった。今回の幹事は小森晶子と、名前は覚えているが顔がどうしても思い出せない男子だった。
返事はもちろん、「NO」だ。幸せなやつらだけが集まるクラス会に興味などないし、友達がいなかった私に、そこでどんな旧交を温めろというのだ。
それでも十年ほど前、二十五、六歳の頃に一度だけ参加したことがある。その一週間前に、小森晶子から携帯電話に連絡があったからだ。東京のアパートで一人暮らしを始めていた。

「はい」
「桐山高校三年三組でご一緒した斉藤晶子、あ、旧姓小森晶子と申しますが、山之内ゆり子さんでいらっしゃいますか」
「そうですが」
「よかったー、やっと見つけた。山之内さん、ずいぶん探したのよ」
「まあ、小森さん、久しぶりね。どうしたの」
「どうしたの、じゃないわよ。あなたの住所がわからなくて、ここまでたどり着くのに苦労したのよ。クラス会のご案内なんだけど」
高校卒業後まもなくして、同じ県内の、少し離れた市に家族で転居した。誰にも新住所を教えなかったので、クラス会のお知らせも「宛所に尋ねあたりません」と、幹事の元に戻っていたらしい。それを、数多い名字ではないから見つけ出せるだろうと、彼女が番号案内サービスなどで調べてくれたそうだ。転居先にいた家族から私の住所と携帯電話番号を聞き出し、わざわざ掛けてきてくれたのだった。だから、その一週間後に開かれたクラス会にだけは出席した。
そういえばそのとき、吉岡くんはいなかった気がする。でも、控えめな人だから、私が気付かなかっただけかもしれない。あの日、結婚や恋愛話を女子たちから聞かされ、

男子たちの自慢気な仕事の話に辟易し、かといって披露すべき自分のことなど何もなくて、早々に会場を後にした覚えがある。

数週間後に写真や住所録が送られてきたが、中身はろくに見ていない。吉岡くんがもし写真に写っていたら、顔や体つきに何か発見があるかもしれない。封筒は捨てずにどこかに仕舞ってあるはず。郵便物が入っていそうな引き出しや箱の中を、ひっくり返して調べた。

「やっぱり、いない」

封筒は見つかったが、写真の中に吉岡くんの姿はなかった。

数枚のスナップ写真には、笑顔の級友たちの横で見事に半欠けか、後ろ向きの私しか写っていなかった。大きめの全体写真では、ピースサインの彼らの前で作り笑いを浮かべている十年前の私がいた。アイシャドウが濃いせいか、目が落ちくぼんで、お疲れ気味のパンダのようにも見える。ちょうど現在の会社に転職した頃で、遠くなった職場の往復と、親の世話や見舞いで実家や病院を往復していたことを思い出した。住所録を見た。

「吉岡圭介――住所不明」

彼の欄にはそう記されていた。黄ばんだ用紙上の「不明」という文字には、どこか謎めいている雰囲気があった。十年前にすでにクラスの仲間と連絡を絶ち、どこか別の土地へ旅立っていた彼。あるいは楽な暮らし向きでなかったために、クラス会どころではなかったのか。現在どこで、何をしているのか見当もつかなかった。

その前の住所録では、私も同じく「住所不明」者だったわけだ。級友たちから見れば、今の私は郵便物が届くから、もう不明者ではない。しかし精神的には、この歳になっても行先の知れない、人生の「行方不明者」ではないかと考えると、久しぶりにひとり笑えた。

新部署に異動してからというもの、人と会うことも話すことも、電話や宅配便のベルの音さえ怖くて、仕事に出かける以外は息をひそめてアパートにこもっていた。だるくて仕方ない。頭が働かない。カレンダーの日付だけを目で追う日々。そんな行方不明な日常が永遠に続くものと思われた。

それなのに、夢とはがきが舞い込んでから吉岡くんのことがどうも気に掛かる。テーブルに乗ったままの案内状や封筒を手に取って、眺めたり文字を追ったり、写真を抜き出したりする自分がいた。小森晶子の電話番号を書き出したりもしている。

一日、二日と逡巡したが、思い切って彼女に電話することにした。住所録の日付からもう十年が経っているのだから、彼の行方がわかっている可能性は高い。

一言目の挨拶はどのようにするか。次に、クラス会のことや近況について話し、そこから自然に吉岡くんの話に繋げていくこと。彼の情報をなるべく多く聞き出すこと。メモを手にして、電話する練習を何度か行った。ちょうど夕食が終わった頃を見計らい、一度深呼吸してからスマートフォンのキーパッドを押した。呼び出し音が五回鳴って、小森晶子は出た。

「あら、山之内さん、久しぶり」

彼女の携帯電話に私の電話番号が登録されていたのだ。予定と違う。

「あの、クラス会の案内をどうもありがとう」

「今回は出席してくれるのね、うれしい。でも、はがきでよかったのに」

「ええ。でも、ごめんなさい。実は今度も仕事で行けそうにないの」

「土曜日なのよ」

「うちの会社、忙しくて」

胸が少し痛い。

「なんだ。じゃ、わざわざそのために電話くれたの。それとも、何かのご報告?」

報告なんて、あるわけないのに。

「いいえ、そうじゃないの。ちょっと聞きたいことがあって」

「何よ」

きつい口調に、準備していた言葉が飛んでしまいそうだった。

「実は最近、同じクラスだった吉岡くんを東京で見かけたんだけど、ちょっと吉岡くんに確かめたいことがあって……。もし連絡先を知っているのなら、教えてもらいたいなって思って」

夢の話のアレンジだ。

「え、いつ。いつ、吉岡くんと会ったの」

どうして吉岡くんに食い付いてくるのだろう。

「ついこの間よ。一か月も経ってないと思うけど」

正確には十日前と、三日前の夢の中。

「どこで」

「うちの会社の近く。お茶の水の聖橋辺り」

夢では教室で抱き合い、土手を二人で歩いていた。

「あなた、大丈夫なの。本当に彼だったの」

「え、ええ」

彼女の詰め寄るような声に、何かまずいことを言ったのかと頭を巡らせた。例えば海外赴任中で、彼は現在日本にいないとか。

「あなた、幻を見たんじゃない」

「幻を。なぜ」

「だって。だって、彼は今年の春に亡くなったのよ」

「う」

何てことを言うのだ。そんな言葉が返ってくるとは思わなかった。

何も言えずにスマートフォンを握りしめていた。声が遠くから聞こえて来る。

「主人が音楽関係の仕事をしていて、吉岡くんのお兄さんとは昔から知り合いだったのよ。たまたま今年の夏にどこかで会ったとき、吉岡くんが亡くなったことを主人が聞いたの。私がクラスメートだったことを知っていたから、お兄さんが話してくれたみたい」

「そう」

「それもね、事故で死んだのか、自殺だったのかもわからないらしいの。聞いたときはショックだったわよ。早すぎるわよね、もう死んじゃうなんて」

「ええ」

自殺だなんて、意味がわからない。

「亡くなったのは、ニューヨークから帰国した翌日だったらしいのよ。彼、向こうで現代アートの作家として活躍してたんですって、ちょっと想像しにくいんだけどね。それでね、久しぶりに家族と食事したときに、飲み過ぎたからちょっと頭を冷やしてくるって外に出て行ったんだって。だけど、待ってもなかなか帰ってこないので様子を見に行ったら、少し遠くの踏切で電車にはねられ倒れていたらしいの」

小森晶子が一気に話した。

「少し遠くの」

「ええ」

「現代アート」

「そうなのよ」

電車が警笛を鳴らして迫ってくる映像が目に浮かび、その先の映像が続くのを必死で打ち消した。

彼の兄によると、うつろな目で踏切の真ん中に立っていたのを運転手が目撃したそうだ。

「信じられないことが起こるものね、この世の中は。今度のクラス会でみんなに知らせるつもりだったのよ」

「そうなの」

心臓が激しく鳴っている。

「彼のお兄さんの連絡先なら主人に聞けばわかると思うけど、聞いてみようか」

小森晶子が親身に言う。

「ありがとう。でも、いいわ。たいしたことを聞こうとしたわけじゃないから」

変に声がうわずった。

「そう、わかった。ねぇ、山之内さん大丈夫。なんだか動揺しているみたいだけど。あなたたち仲がよかったものね」

仲がよかった？

「そんなこと、ないよ」

「二人で漫才やってるみたいだったよね」

「まさか」

小森晶子は別の人と勘違いしているのではないか。私たちは教室一寡黙な男子と女子だったのだから、漫才なんてあり得ない。

「後ろの席で、楽しそうだったじゃない」

わけがわからなくなって、胸が苦しくなった。

「何か気になることがあったり、聞きたいことがあったら、いつでも電話してちょうだい。私、大体家にいるから。子供に手が掛からなくなって、仕事を再開しようかと考えているの。山之内さんに仕事のことを聞きたいし。またお話しできるとうれしいわ」

「ありがとう。じゃ、またね」

声がかすれ気味だった。

「ええ、元気を出し……」

声が聞こえていたが、人差し指で電話を切った。

しばらくスマートフォンのホーム画面を見つめていた。吉岡くんの足をつかむシーンが繰り返し再生された。

三か月が過ぎた。吉岡くんの死は言葉として受け入れた。でも、実感はない。だって、小森晶子に電話をしなければ、彼はまだ生きていたのだから。だからときどき、電話しなければよかったと思う。でも、電話してもしなくても同じだったのかなとも思う。

夢でデートの約束はできないけれど、彼らしい風貌の人が夢にひょっこり現れることがある。高校生風のときもあれば、ユニークな格好をして、アーティストとして訪ねてくることもある。でも、私が彼を呼んでいるのか、彼が勝手にやってくるのか、夢のことはよくわからない。ただ残念なことに、あれ以来二人は抱き合っていない。

通勤や散歩中に夢や記憶の欠片が、ふいに見え隠れするときもある。追いかけて捕まえて、ジグソーパズルのピースを繋ぎ合わせるように、記憶の穴を埋める作業をする。彼の歩き方、肩幅、提げていた薄い学生鞄、笑ったときのシワの寄り方、足のサイズ。あれからいくぶん、形ができてきた。

彼の私生活やニューヨークでの活躍は知らない。いずれどこかで、彼の作品に出会えるときが来るだろう。それまで想像をたくましくして、彼の物語を私は紡いでいく。

彼は自殺をしたのではない。不幸な事故だったのだ。久しぶりの故郷で、懐かしい景色や家族との語らい、日本料理や酒の味に酔いしれて、ついつい遠くまで足を伸ばした。そして、金網が張られた線路際で夜空を見上げる。

「星がけっこう見えるんだな」

彼の実家付近では、見える星の種類も数も、光の強さも

ニューヨークとは違った。

踏切を渡ったときに、うっすら光る赤い星を見つけて立ち止まる。

「あの星は」

そのときすでに、カーブの向こうまで電車が近づいていた。遮断機のバーは上がったままだ。警報器は壊れていた。周りには誰もいなかった。

そうでもなければ、彼が私の夢に現れたりするわけなどないではないか。あの日、星たちの夢を一緒に語ったりしたわけがないではないか。

赤い星の和名は何だったのか、まだ思い出せない。でもいつか、夢でもう一度教えてくれることだろう。目覚めるときっと、忘れていそうだけれど。

朝、今日も不幸にも目が覚めた。ブラックコーヒーを飲んで眠気を払い、洗面台に立って髪の毛の手入れをする。パンツスーツに手足を通し、新しい口紅を塗って出勤の準備を完了する。

白いスニーカーに足を入れて、ひもを結ぶ。

「行ってきます」と、誰もいない部屋に向かって声を掛ける。

ドアノブを回す。

今日の一歩を踏み出した。

天野いずみ　あまの　いずみ
1953　富山県高岡市生まれ
77　立教大学理学部卒業
2010　文芸同人誌「朝」に入会
現在に至る　東京都杉並区在住

小説を深く読む
ぼくの読書遍歴
三田誠広
芥川賞作家が自身の人生を振り返りながら、名作小説について語る読書エッセイ
小説というものがあったから、ぼくは小説家になった。
志賀直哉◉『小僧の神様』
川端康成◉『伊豆の踊子』
梶井基次郎◉『檸檬』
大江健三郎◉『万延元年のフットボール』etc.
定価2,4本体2,200円+税
海竜社

カレン民族解放軍のなかで

LIVES IN THE KAREN STRUGGLE
西山孝純
Takazumi Nishiyama

若き日本人義勇兵の手記

ビルマ（ミャンマー）の民主化をめざして、カレン民族解放軍のなかで銃を持って戦う日本人の若者がいた!!
彼は何を考え、何を賭けて戦いの現場に身を投じたのか。
少数民族カレン族の苦闘とビルマ学生たちの民主化への苦悶——激動の渦のなかで闘い続ける日本人青年の驚愕の手記。

「我が神よ……
永遠に尽きることはありません
砂と海と、水のざわめき
天と光と、人々の祈りは……」

アジア文化社 195
1512円（税込／送料共）御注文はアジア文化社まで

文学が好きで書くことが好き

朝

東京都

ゆるいスタンスで三十五年

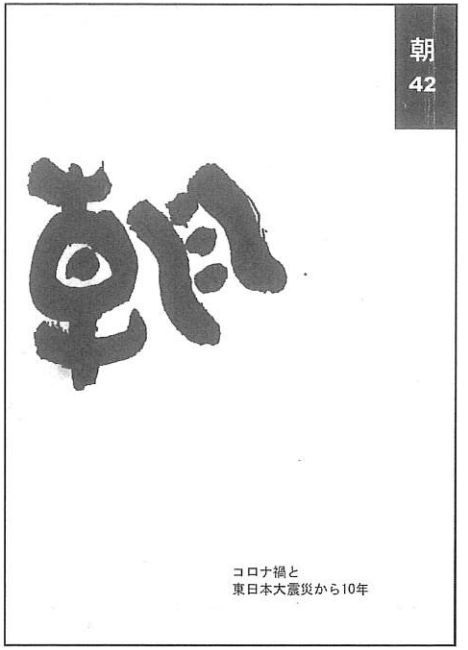
同人誌を立ち上げる時は、大抵その誌名に『文学的志』のような強い思いを込めるものだ。ところが、一九八八年に創刊された「朝」という誌名には意味がない。つまり、何物にも規定されず、ただただ文学が好きで、書くことが好きな人が集まって、冊子を出そうという、当世風に言えば、ゆるいスタンスで始まった。

発起人は、同人誌「文芸首都」や「公園」で中堅を担っていた宇尾房子氏とその同人仲間。そして千葉県浦安図書館館長の竹内紀吉氏だった。

それから月一回、浦安図書館の会議室や浦安の公民館で会を重ね、年に一回か、三年に二回のスローテンポで、細々と同人誌を出し続けた。

原稿の締め切りは、その都度決めていたし、『朝』時間などという言葉がまかり通って、原稿が集まるまで、一週間から三週間くらいは、平気で延長された。

それでも何とか冊子を出し続けられたのは、月一回の会合と、そのあとの飲み会で、文学や政治について熱く語り合い、時には一泊旅行へ行ったりすることがこの上もなく楽しかったからに違いない。



そんな中で、何人かの人が入会し、退会し、そして何人もの人が、鬼籍に入ってしまった。そのたびに追悼号を出したが、

「最近は、『朝』に追悼文しか書いていない」

などと、悲しいことを言う同人もいた。

発起人の一人、竹内紀吉氏が亡くなると、会合は東京の喫茶店に移され、その後ネットで調べた会議室などを、難民のように転々として、最近は飯田橋のルノアール会議室に落ち着いている。

その間、同人の吉住侑子さん、千田佳代さんが相次いで

「朝」同人合評会　2022年5月15日　飯田橋ルノアールにて

小島信夫賞を受賞するという快挙もあった。

その後、会の要だった宇尾房子氏までもが亡くなり、会の存続が危ぶまれたが、ゆるいスタンスゆえに、発行人や編集人をめぐってもめることもなく、元刑事という変わり種の高橋俊輔氏が発行人と編集人を引き受けてくれた。さらに二〇二〇年、体調を崩した高橋氏が休会し、発行人村上玄一氏と編集人中村桂子にバトンが渡された。

いくつかの出版社で編集の経験があり、日大芸術学部研究所の教授をしていた村上玄一氏が入会してから、会の構成員が一変した。村上氏がゼミで教えていた若者が、次々と入会してきたのだ。二十代、三十代の会社員、四十代の子育て中の主婦、そして何と現役の女子大生まで、上は八十四歳から下は二十一歳という幅広い年齢層を抱える会となった。若者達が、廃れつつある紙文化とどう向き合っていくのか、今後が期待される。

因みに、今回同人雑誌優秀賞に選ばれた天野いずみさんは、「朝」の発起人だった宇尾房子氏の娘さんである。彼女は理系女子だが、宇尾房子さんの追悼文を書いてもらった縁で、「朝」に入会した。奇縁である。

新体制で出すことになった四十二号の編集会議の時、毎号何かテーマを決めて、小説やエッセイを書いたらどうかという案が出され、承認された。

時は二〇二〇年。会はコロナで休会続きだったが、冊子

朝 ═ 同人以外からの寄稿

だけは出そうと、テーマは必然的に「コロナ禍」と決まった。

ところが、「それぞれのコロナ禍」というエッセイもそれ以外に集まった作品も、それこそコロナ禍のせいかみんな短めで、それはホチキスで止められるほどの薄っぺらさだった。

そんな時、助っ人が現れた。以前編集人と同じ同人誌に属していたAさんから、読んでほしいと原稿用紙百五十枚の小説が送られてきたのだ。それは大船渡出身の彼女が、東日本大震災の津波で、四人もの肉親を亡くした鎮魂歌だった。テニヲハを超越した、破天荒ともいえる独特の文体には、妖しい魅力があった。こういった作品を取り上げ、発表するのが、同人誌の一つの役割ではないか？　わたしは迷わずAさんに連絡し、「朝」に寄稿してもらうことにした。かくして、四十二号の特集は「それぞれのコロナ禍・東日本大震災から十年」となった。

そして不思議なことに、四十三号の準備に取りかかっていたわたしの元に、またしても原稿が届いた。それは、大学の文芸サークルの先輩Kさんからの「三島由紀夫論」だった。彼は、卒業してから文学とは無関係な仕事をしていたが、文学が好きで、文学論が好きで、ずっと三島由紀夫に拘っていた。その三島由紀夫論の行間には、これだけは書いておきたいという気迫がみなぎっていて、圧倒された。

その瞬間、Aさんの時にはまだ曖昧だったわたしの編集人としての思いは、同人でなくてもいい、一生に一度、どうしても書いておきたいという作品を積極的に載せていこうという、強い意志に変わった。さらにKさんの論文に触発されてYさんが書いた三島由紀夫論も同時に寄稿してもらうことになり、それは相乗効果を生んで、四十三号の特集は「コロナ禍ふたたび・三島由紀夫論二編」と決まった。

この同人以外からの寄稿という企画がいつまで続くかは不明だが、同人誌の一つの在り方として、その方向性は間違っていないと思っている。

（編集人・中村桂子）

朝の会
〒196・0021
東京都昭島市武蔵野三丁目三・四　122
村上方
TEL 042・848・2745

コラム　新文芸ドン・キホーテ

アンソロジー的なものの意外な愉悦

日本文学がさほど好きでない私も、宮本輝が傑作短編&掌編ばかりを選んだ「魂がふるえるとき　心に残る物語　日本文学秀作選」（文春文庫）は長年、愛読している。川端康成の「片腕」、永井荷風の「ひかげの花」、水上勉の「太市」と、大御所達の裏代表作ともいえるものばかりで、万人にオススメしたいアンソロジーである。

一方、アンソロジーでこそないが、村上春樹の「若い読者のための短編小説案内」（文春文庫）は、海外の大学で日本文学について語った講義を元にして書いた評論集らしく、およそ日本文学に興味のなさそうなハルキ先生が、熱く戦後文学を読み解くというミスマッチが笑えるような頼もしいような、愉快な一冊だ。

まず読む機会が与えられない、無名の書き手の秀作を読める本もある。

エッセイ賞の選考委員でもある、我らが水木亮先生の「エッセイを書こう　心を伝える楽しみ」（山梨日日新聞社）はわずか一五九頁の新書ながら、技術を教えるための例題として、エッセイ賞の受賞作や水木先生のエッセイ教室の生徒作品の多くを引用し、掲載している。「文芸思潮」での連載を元にした本であり、少しでも生徒達の書いたものを掲載したいという親心のあらわれだろう。技術書でありつつ、投稿エッセイのアンソロジーを読むかのような読後感だった。なかでも、冒頭に引用された日沼よしみさんの「のし袋」という短いエッセイは傑作なので、多くの人に読んでいただきたい。

アンソロジーに含めると異論が出そうなあたりで紹介したいのは、今年、発売された「柳田國男自筆　原本　遠野物語」（岩波書店）だ。税込み五千五百円と高額ながら、柳田の毛筆草稿とペン字初稿と初版本の三種類を見比べながら「遠野物語」が読めるというマニアックな内容である。

「遠野物語」は文学青年だった佐々木喜善の語る話を柳田が聞き書きして自費出版したもので、真の作者というか功労者が柳田なのか佐々木喜善なのかで、ファンの間では議論され続けている。聞き書きに忠実だと思われる草稿から、初稿や初版本との差異はわずかなのだが、もはや「遠野物語」は名作文学であり、スピリチュアル界隈では宗教のように崇め奉られているため、一、二行の加筆があきらかになるだけでも「柳田が伝承に余計な一文を付け加えていた」となり、喧々諤々（けんけんがくがく）の議論の火種となりそうだ。

アンソロジーは書く人間と選ぶ人間、いいところだけを読みたい人、様々な思惑が絡み合った末に編まれる。狡猾と打算の読み物といえるも、短期間で多くを知り、成長したいと願う文学志望者達には、ドーピングのように甘く効く。

同人雑誌優秀作

季刊作家 99号

光復香港

鈴木友範

香港の中心地と中国国境との中ほどにある沙田（サーティン）に私が居を構えて二十余年になる。当時はヤオハンというスーパーがあり日本の食材が手に入れられることが決め手だった。駅前の地上階には大きなバス乗り場があり、その上は七階建ての商業施設になっていて、いつも賑わっている。メインのショッピング街には吹き抜けのホールがあり、ガラス張りの天井からは陽光が注ぎ、夜には星空を望むこともできた。かつては下町風情に満ちた個人商店ばかりだったが、香港の中国への返還以後、本土からの中国人観光客を目当てにした高級ブランドショップへと変貌している。その広場に大勢の若者が座り込んでいた。フラッシュモブと言われ「沙田で買い物をしよう」と呼びかけられた、誰が主催とも分からぬ集会だ。その周りにも、ホールを見下ろす各階の通路にも二重三重に人々がひしめいている。五階部分から大きな垂れ幕が数本下げられていた。もちろん中国語だが、漢字なので多少の意味は読み取れる。

「今日の香港・明日の台湾」

「香港を取り戻せ」

「革命の時だ」

「送還条例反対」などと読める。

座り込んだ参加者の数人が眼帯を付けていた。それは先日のデモの折、警官隊が放った催涙弾で若い女性が右眼失明という大怪我を負ったことに対する非難だ。私は人垣をかき分け前に進み出た。広東語の叫びに呼応する声がホール全体に響く。数人毎に座り込んで折鶴を作っている若者たちも各階で動き回る者たちも全員がマスクをつけている。黒のキャップやヘルメットを被った男女はゴーグルやガスマスクをぶら下げている。ほぼ全員が動きやすいようにバックパック姿だ。華奢な体つきと軽快な動きで彼らの若さが知れる。ホールで遠巻きに立つ人々や、手すりから身を乗り出している聴衆からも声が上がった。女性特有の甲高い声が重なるように響き渡る。そのシュプレヒコールを耳にしていると、様々な思いが脈絡なく浮かんでは消える。

「……後悔することはないかい？」と、私の母が聞いてきたことがある。苦労して大学まで行かせた息子が六年かけてかろうじて卒業したものの、名もない小さな会社に入り、さらに転職を繰り返す様子にいたたまれなかったのだろう。あるいは、私が伴侶と決めた女の膝先に包丁を突き差して抗ったにもかかわらず、所帯を持ったことに歯噛みしていたからかもしれない。後悔……、それは誰にでもある。だが、それを口にした途端、次に続く言葉は言い訳か慰めにしかならない。

母や父の思いは十分理解できた。団塊の世代と言われる私たちは、あまねく親たちの願望を背負ってきた。戦後の焼け跡を垣間見て、子供には安定した市井の生活をという思いを込めて育てられたのだ。一介の官吏のつましい所帯でありながら国立大学まで進ませることが出来たとなれば、後は我が子の豊かな生活を夢見るだけということは分かる。その意に逆らって私は中途退学さえしようとした。かろうじて卒業したものの転職を重ね、「どこの馬の骨とも分からぬ女」と結婚を決めた。さらに幼い子供がいるにもかかわらず三度（みたび）会社勤めを辞めた。そんな人生に残るのは悔いばかりに違いないと、母はそう言いたかったのだろう。

私が地方の大学に入学したのは一九六七年だった。全共闘という名の学生運動が激しくなるころだった。ひたすら勉学にいそしんだ一人息子が、嘱望された将来を棒に振るような行動に走るとは思いもしなかっただろう。

「一体、誰が唆（そそのか）したのか。うちの息子に限って……」と、大学教授の研究室まで乗り込んできた親たちの行状は、私の仲間だけでなく広く学内で格好のネタにされた。親たちから逃げる私の姿を見た党派の活動家からは「親の陰に隠れる、腐れノンポリ活動家」と揶揄された。父親の望み通り、技術者として生業を立てることが出来れば、おそらく平安な生活が叶っただろう。郊外に庭付き一軒家を建てることも出来たに違いない。同居が叶わぬとも、近くで孫の世話をしながら余生を送ってもらうこともできただろう。そうであれば病弱な父も永らえ、母の記憶も健全であり続けた

かもしれない……。

そんな昔の事を鮮明に思い出したのは数週間前の事務所からの帰り道だった。電車が沙田の二つ前の九龍塘（カオルントン）駅でドアが閉まる寸前ホームに慌ただしい動きがあり、怒号が飛び交った。駅構内の遠くに警官隊の姿が見えたかと思うと、どっと人影がなだれ込んできた。スエットパンツのような肌にぴったりした黒い服装でマスクとゴーグルをつけた、いわゆる「武闘派」と言われている若者たちが押し合いながら車内の奥までやってきた。

もちろん週末毎に繰り返される街頭デモのことは知っていた。百万人越えの大集会が開かれたことには驚かされたが、それ以後日を重ねるごとに反政府運動が高まり、今や香港全体が政治色に染まっている。そんな最中、仕事帰りの列車になだれ込んできた若者たちの一人と目が合った。向き合ったその男の服から、かすかに催涙ガスの刺激臭がした。私は思わず背筋を伸ばし無意識にバッグを探った。そこに手付かずのペットボトルの水があった。私は「ガス」と声に出さず唇だけを動かし、全身黒づくめの若者にボトルを差し出した。

「サンキュー、サンキュー」

マスク越しの声とともに仲間の黒服たちが一斉に振り向いた。沙田駅に着き、私が「気を付けて」とすれ違いざまに囁くと、再び「サンキュー、サンキュー」という唱和が返ってきた。

おそらく私はいつもより早い足取りでホームを歩いたと思う。デモ隊に向かって打ち込まれる催涙弾に水をかけて、発煙を抑える様子は何度もニュースの実況で見ていた。そんな場面を見るたびに、かつて佐世保で原子力空母寄港阻止の集会に参加したときのことが過（よぎ）った。ヘルメットとタオルという装備だけで隊列を組み、立ち込めるガスの中を駆け抜け、盾を揃えた機動隊に突き当たっていくデモの様子や、漂う催涙ガスにむせ、水で洗い流しても消えない眼の痛みが蘇った。ペットボトル一本の水がどれほど役に立つか分からないが、私の気持ちは伝えられたと思う。

数日後、私が予定していた帰国便がキャンセルになった。二カ月ほど前の六月十六日、人口七百余万の香港で行われた集会には二百万人の人が集まった。話半分にしても相当な民意だが、行政側は一切の妥協はしないと強硬姿勢を貫き、週末毎に各地で抗議行動が繰り返され、路上占拠という事態にまでなった。そんな状況の中、七月の二十一日に新界という中国本土に近い元朗（ユンロン）という地域で、白シャツ姿の数十人がデモ参加者のみならず一般市民を無差別に襲う事件が起きた。逃げ惑う人を地下鉄構内まで追いかけ、誰彼構わずこん棒を振り下ろすという暴挙だった。近くにいた警官は止めに入ろうともせず、応援の警察部隊が駆けつけたのは白シャツ集団が去った後だったという。地域に跋

扈するヤクザ集団の仕業とされているが、その直前に地区の親中議員がその白シャツ集団を励ます映像や、そこにいた老人の証言などがネット情報に上がり、警察幹部とグルになった暴力組織による反政府運動圧殺を目論んだ襲撃だと、多くの香港人はそう受け止めた。

その事件がデモ参加者の怒りを呼び起こし各地の警察署が抗議行動の標的にされ、その周辺一帯が夜毎占拠されるようになった。その勢いを借りて八月の十一日、若者たちが空港ロビーに集結して座り込んだ。しばらくして警官隊が介入し、大混乱になった挙句多くの便が運航中止に追い込まれた。翌日の十二日には、空港ロビーから退避しようとした数人の警官が襲われたときには腰の拳銃が抜かれ、銃口が若者たちの鼻先に突き付けられるまでになった。

香港に足止めされた日曜日、本来なら私がいないはずのところにパートのヘルパー、ジェニーがやってきた。ジェニーとは顔を合わすことは滅多になかったが、そんな経緯で久しぶりに会った。ジェニーを出迎えようと沙田駅前のバス停近くに行くと、何人かの黒服姿の若者が小さなステッカーを壁や柱に貼っていた。キャップを被りマスク姿をしているから表情を窺い知ることが出来ないが、数人のグループは手慣れた動きをしている。遠くでシュプレヒコールが響くと、遠巻きに立ち尽くす人垣がすぐさま呼応する。ビラ貼りをしていた男女も手を止め、声を上げる。広東語など分かるはずもないのだが、唱和されるリズムに引き寄せられる。

後ろから肩を叩かれた。振り返るとジェニーが立っていた。

「平野（ヒラノ）、どうしたの？　泣いているのか」と、ジェニーが私の顔を覗き込んだ。

私は慌ててハンカチを取り出した。

「おかしな人……」と、ジェニーが目がしらを拭う私を見ていた。

遠い昔、五十年も前の忘れかけた日々が、また過る。

二日降り続いた後の冷たい日だった。目が覚めた昼頃、まだ細かい雨滴があたりを濡らしていた。午後は毎日出欠がそのまま単位の修得に関わる有機化学の実験講座だった。すでに私は欠席を重ねていて、担当の助手から度々注意を受けていた。そうでなくても二度の留年で私は名簿の最後に記され、今年こそは卒業しろと念押しされていた。しかし、部屋から出ることすら億劫で、準備した白衣もノートも隅に置いたままだった。

岐阜市内で「沖縄返還協定阻止」の集会が予定されていた。十一月十四日が近づくにつれて学内は次第に騒然とした雰囲気に包まれていた。門の横には赤い角張った字と最後に大きな「！」マークが書かれた党派の立て看板があり、

十数人のヘルメット姿の集団が連日激しい演説とデモを繰り広げていた。自治会旗を先頭にして、時には正門から道路まではみ出し通行する車を止めることもあった。数百メートル先にある地元の警察署に向けた示威行動だった。

そのこともまた、キャンパスへ向かう私の足を鈍らせた。学内の目を引きやすい壁に「岐阜反戦行動委員会」あるいは「プロメテウス団」と記された私の作ったビラが貼られている。同じ十一・一四闘争への参加を呼びかける学部の党派には目障りだったに違いない。「プロメテウス団」というのは当時私たちが活動していたグループのことだ。私と工学部の矢部徹、顧問のような形で議論の道筋をつけてくれる教育学部卒の江本賢二が主なメンバーだった。そんな中、橘江里子が印刷されたビラの束を持ってやってきた。遠く離れた教育学部の江里子がわざわざ重い荷物を抱えて来るまでもなく、矢部徹が講義を受けるためにキャンパスに通っているはずで、その矢部が訪ねてくるだろうとばかり思っていた。

「平野さんどうしたんですか、皆が寂しがっていますよ」と、江里子は屈託ない笑みを浮かべていた。

「風邪で寝込んでいるかもって、矢部さんが心配していたけど、元気そうですね」

「特にどうってことはないよ」

「十四日は来ますよね」

「もちろん行くよ」

「少し変、いつもと違うみたい。でもいいか、元気そうだし。じゃあ、よろしくお願いしますね」

両手を前で合せ、自分に大きく頷いて江里子は急ぎ足で帰って行った。江里子は仕種や態度に感情が素直に出る。おそらく矢部と一緒に近くまでやってきたに違いなく、好いた男と連れ立って行動出来て、それが嬉しくて仕方がないのだ。

「橘江里子は少女そのものだね」と評したのは江本賢二だった。江本だけでなく誰もが橘江里子の底抜けに明るい振舞いには感嘆しきりで、議論が噛み合わなくなっても、「私には分らないわよ」の一言でお互いがあっさりと別の話題へ移っていけるほど鷹揚だった。そのあまりに純真すぎる性格は、ともすれば殺気立つこともある議論の場を和ませることも多く、いつの間にか仲間として迎えられていた。

それから二年余、最初から矢部徹への憧れともいえる思いを隠そうともせず、そして矢部がはっきり恋愛の対象には考えていないと直接間接に繰り返し伝えることにもめげず、とうとう相手をその気にさせた。橘江里子とねんごろになったことを咎めたつもりはないが、矢部が仲間との時間を避けるようになるにつれて、グループの間がぎくしゃくするようになってしまった。部屋に帰りたがる矢部に、

私が不満顔を向けたことがきっかけだったかもしれない。

私とジェニーはすれ違う人を避けながら狭い通路を歩いた。香港の住まいは大抵が高層だ。一、二階部分に商店や駐車場を備える大きな建物があり、その上に四、五棟の細長く高いアパートが立つという形式だ。駅近くでは三階部分が通路を兼ねた生活空間になっていてレストランや小売店があるから、平日であろうと人通りは常に混雑している。

「まったく、男って……」

部屋に入るなりジェニーは大げさに声を上げた。ソファの背に服やバスタオルが積まれ、窓際には吊るされた洗濯物がぶら下がり、床はほこりにまみれていた。パソコンの前には灰皿やらリモコンなどが散乱している。座ったまま手に届く範囲に必要なものがあるという便利さの結果なのだが、確かに乱雑極まりない。

「アイロン掛けから始めるから、コーヒーでも飲んで休むといいわ。コーラがあれば頂戴ね」

笑顔を作ってジェニーがアイロン台を組み立てた。

「久しぶりだな……」

「五月以来ね、会うのは」

ジェニーはコーラを一口飲んでアイロン掛けをはじめた。

香港では多くの家でヘルパーを雇い入れている。子供に英語を覚えさせるということが教育に必須ということもあってフィリッピン人のメイドが重宝されている。ヘルパーの最低賃金はわずか四千香港ドル（六万円）程度だ。

「デモのせいで大変なのよ……」

アイロンをしながらジェニーが話かけてきた。

「そうか、ボスは警察官だったね」

「そうなの。交通課だったけれど警備に駆り出されてね。だから時には夜遅く帰ったりして起こされるし、泊まりも増えたのよ。それだけなら我慢できないこともないけれど……」

ジェニーは雇い主の実情を教えてくれた。雇い主の家には十八歳の息子と十七歳の娘がいる。息子の恋人は妹の同級生で、どうやらその娘がデモの第一線で飛び回るほどの活動家然となり、息子の方が縁を切られそうになっているという。一方で妹の方は学校での交流の中で黒服のデモ隊に共感を覚え、親の目を盗んで協力しているらしい。そして事務仕事とはいえども病院勤めの細君は、次々に運び込まれるデモ関連の負傷者を目の当たりにして「同じ香港人にやりすぎだ、横暴だ」と夫を責めているらしい。

「それは厄介だな」

「責められた旦那は私に当たり散らすし……。やっていられないわ、まったく」

仕上がったワイシャツをパタパタと振りながらジェニーのぼやきは止まらない。

「最近、息子が妹にどうしたらデモに参加できるか聞いている始末よ」
「若い者の恋愛は……」と、私は両手を顔の近くにおいて視界を狭くする仕種をした。一途になる、という英語なんかは使い慣れていないから出てこない。
「……ボスの耳に入ったら一大事だな」
「それはもう、大変ね」
「しかし、惚れた女のためにデモに参加しようなんて、やはり若いな」
「まったく、女ならまだしも……。男がすることではないわね」
ジェニーが口元を歪めた。自分の長男と同じ年頃だから雇い主の息子に対する思い入れがあるのだろう。
「そうか……」
「さて、次は部屋の掃除ね。あなたは散歩でもしてきなよ。部屋に居られても邪魔になるだけだから」
「そうするか。疲れたら好きなものを飲んで構わない。スナックも自由に食べてくれ」
追い出されるように私は公園に向かって歩いた。アパート下の商店街を抜けるとオーバーパスで公園まで行ける。対岸にはやはり高層のアパートがひしめいている。だが、一旦公園の中に入れば緑と静寂に包まれる。鯉が泳ぐ池の周りのベンチや東屋にムスリムのヒジャブを被った女性たちが車座になっていた。ジェニーと同じヘルパーたちだ。以前はヘルパーといえばフィリッピン人だったが、最近はより賃金の安いインドネシア人が増えていて、土日ともなると大勢が集い、お互いの交流を深めている。私は公園を抜け、川沿いの道に出てそこで煙草を取り出した。魚が跳ねたのか、揺らぐ川面の波紋を眺めながら木陰で佇んだ。

岐阜市内の中央公園に辿り着いたとき集会は準備も整っていた。ざわざわとした物音が入り乱れ、織り成す集団のヘルメットが街路灯に照らされていた。横道に灰色の大型車が数台停められていて、機動隊員が物々しい装備で待機していた。公園には減多に揃うことがなかった党派や自治会旗に加え、地域反戦、学生戦線、あるいはべ平連、薬科大学反戦といった遠方のものから地区労青年部と記された十数本の旗が棚引いていた。各々の旗の前に座り込むヘルメット姿の学生らの数も、公園を取り囲む市民も多い。私たちが主催する「市民反戦行動委員会」の旗の前にも沢山の人が座っていた。
「平野さーん。ここ、ここですよ」
手を振っていたのは橘江里子だった。横にハンドマイクを肩にした矢部徹がいた。
「驚いたね、これほどの集会になるとは」
「あれもそうだよ、官憲もかなり気合が入っているようだ」と、矢部は道路に並ぶ機動隊に向かって顎をしゃくり上げた。
「デモ指揮がいないんだよ」と、矢部が言った。
「いいじゃないか、だらだら歩くデモだっていいさ」
私がそう応えると、矢部は眉を寄せて黙り込んだ。江里子が小首を傾げて矢部を覗き込む。ラウドスピーカーを調整する甲高い電気音が耳に突き刺さった。
「そろそろ始めるか」と言い放って歩き出した矢部の後ろを江里子が追う。
しばらくすると、マイクを口許に構えた矢部徹の抑揚と息継ぎが交じり合う独特の演説が響き渡った。公園のまわりの人垣が揺れ始めた。ばらばらだったグループが旗のほうに向き直り、熱気が会場のなかに篭った。
「異議なし！」と、自分たちの代表のアジテイションをさらに駆り立て、その合の手の大きさを競うように、あるいは対抗するように別のグループが一斉に「ナンセンス！」と声を上げる。その応酬がいやがうえにも喧噪を掻き立てる。
私は一番端に立っている組織名のない、ただ「反戦」とだけ書かれた旗のところへ歩み寄った。旗竿にしがみつき落ち着かなさそうにしていたのは教育学部の顔見知りだった。
「今日は日和見を決め込むからな、代わってくれ」と、私が促すと男はさっと竹竿を渡してくれた。それは片手では支え切れないほど太目のもので、旗のせいもあってかなり重く感じられた。いつもより長く、持ち運びを考え繋いで使う旗竿とは違った一本ものだった。見渡すと全部が同じような竹材に旗がなびいていた。
「これがないと様にならないだろう」と、いつもなら冷ややかな視線を向ける党派の顔見知りがヘルメットを頭にかぶせてくれた。
罵声が止み、演説とともに隊列が組まれ張り詰めた空気が漲ってきた。もしや、と思ったとき矢部の再度の煽動が響き渡った。党派の部隊の方から呼び笛がけたたましく響いてきて、市内中心部に向けたデモ行進の始まりを告げた。矢部が再び雄叫びにも似た演説を始めた。
「本日のぉー、この闘いをぉー、沖縄人民だけでなく、国内外のすべての、抑圧された人民と連帯するー。そしてぇー、我々自身、日本帝国主義の解体に向けたぁー、辺境部からのぉー、断固たる闘いにー、合流することを、はっきりと宣言しようではないか」
身体を前後に揺らし、まるでマイクなど必要としないほど激しく性急なアジテイションだった。私は思わず旗竿から手を放しかけた。肩に先端の旗と風の重みが喰い込んで、竿が斜めに倒れ掛かる。そのとき、合図のように笛が吹き鳴らされ人波がどっと揺れた。押されて、私は旗竿隊の先

頭に出た。

「何なのだ。矢部は何を言っているのだ」

私のその叫びは、一塊まりになったデモ隊の「キョウテイ、フンサイ」から、ただの「ワッショイ」になった掛け声に掻き消された。

矢部徹が、いつだったか「辺境最深部に向って退却せよ」という武闘闘争を煽る評論集が面白いと話していたことは確かにあった。だが、むしろそれは酒の席や冗談を交わしているときに引用する程度の、まともな批判さえしない扱いをしていたはずで、ましてや公の場で宣言するほどの内部論議もなかった。しかし私たちが依拠する「市民反戦」はそうした一元的な先鋭集団ではないと、矢部自身も言っていたはずだった。

だが、異議を唱える間もなかった。動き出した一団は統制よく、地を鳴らすように公園の出口に向かっていた。遠巻きにしていた群衆がそれについて移動した。その中から誰かが拍手しながら激励の声をかけてきた。党派の幹部だったかもしれない。

「本気なのか」と、そう呟いたとき、長めの笛の合図で旗竿が一斉に前方に倒され、垂れた旗が地を這った。道路を挟んで盾を並べた機動隊が歩道から一糸乱れず踏み出してくるのが見えた。隊列の左端にいた私には、ジュラルミンの盾が路地や家の入口を塞ぐような陣形に変わる様子がはっきり掴めた。

私の竿の先が防御線を張る機動隊の盾の方に向いた時だった。竹竿を譲ってくれた男が引き攣った形相で走り寄り、私の旗を巻き付けた。制止する間もなく、機動隊と群衆に紛れていた私服の警官が雪崩を打ったように押し寄せてきた。警官たちのホイッスルが響きフラッシュが焚かれ、衝撃が肩に腰に走った瞬間私の身体が宙に浮いた。上着が裂かれ、蹴られ、揉まれ、殴られ、そして押さえつけられた。

気が付くと、騒ぎは遥か後方で起きていた。怒号に交じってぱちぱちと枯れ枝が打たれるような音が聞こえたが、機動隊に取り囲まれて詳しい様子は掴めなかった。両手に手錠が喰い込んでいた。右手に眼鏡を握り締めていたが、どうやって外したものか一瞬の間によくもそんな余裕があったものだと呆れた。眼鏡なしで細かいことは見えず、ただ収まっていく騒ぎの音で、デモ隊は散り散りにされたと分かった。

警察署に連行され、首に看板をぶら下げて写真を撮られた。更に両手全部の指紋を採られ、裸電球だけの通路を引かれて留置場に入ったときも、まだ事態を呑み込んでいなかった。動転していた訳でもなく、殴られた痛みがひどかった訳でもなかった。逮捕されたことよりもむしろ、謀議されたとしか言いようのない成り行きと、唐突に叫ばれた矢部のゲリラ的直接闘争を示唆する過激なまでの転換のほうが気掛かりだった。それが署員にはふてぶてしい奴と取られたのか乱暴な扱いを受けた。のろい足だと言われては蹴られ、歩く方向が違うと背を叩かれた。

「舐めるなよ。殺人犯と同じ房に入れてやるからな。泣いて助けを呼んでも自業自得ってもんだ」と、そんな言葉を浴びせられた。

薄暗い留置所には三部屋があった。どれも鉄格子で中は丸見えだった。それぞれの部屋は監守から死角にないよう配置されている。右端にトイレがあったが扉というより単なる仕切りが付いているだけで、しゃがめば監守からすべてが見通せるようになっている。

「ここでは、それも取るんだよ、よく覚えておけ」と、短い棒で示されたのはベルトだった。

「それもだよ」と、監守は棒を突き付けた。

「眼鏡は駄目だ、何も見えなくなる」

「規則だ。つべこべ言うんじゃない」

「ど近眼だから……」

「うるさいんだよ、若いの。ベルトは首吊り、眼鏡のガラスは手首と相場が決まっている。分ったら静かにしろ」と、まったく別な方向から声が上がった。

鉄格子の奥からだった。凄味を利かした低い声だった。振り向くと角刈りでがっしりした男が、臆するふうもなく畳んだ毛布の上で胡座をかいていた。監守が横目遣いに視線を走らせ、何やら言いたげにしたが、しかし口許を歪めただけだった。刑事の言い残した「殺人犯」という言葉が過った。

「早く眼鏡を外しなさい」と監守が促した。

入室させられたのはやはり角刈り男の房だった。

「三十一号。三十一号がお前だ。名前なんか呼ばないからな。もう一度言うぞ。三十一号だ。それとおしゃべりは厳禁だからな、中では。分かったな。分かったら返事しろ、三十一号」

房の中は饐えた匂いがした。毛布と薄い蒲団以外なにもなく、木の床は何の汚れか幾重にも染みが浮き出ていた。中は意外に広く、私は同房の男から少し離れた場所に座り込んだ。監守が軽い金属音を立て大きな鍵束を腰につけた。看守が机に戻ると、両隣にも拘留された人がいるはずなのに留置場内は物音一つしなくなった。

狭い中に得体の知れぬ男と同居する緊張感で鼓動が高ぶった。男がどう応対してくるのか。どうすべきなのか、謂われのない暴力に争うことなく屈伏するしかないのか。力負けを覚悟に抵抗すべきなのか。それとも酒の席の戯言で言い合う「革命的敗北主義」で恭順さを示すべきか。

「それはお前の分だ。消灯までは敷いて座っていろ。横になれないだけ不満だが、まあ仕方ないな」

暫くじっとしていると、男が布団を指差してそう言った。

監守さえ黙らせた威嚇に満ちた時と打って変わって諭すような口調だった。

「何をやってぶち込まれたんだ」

「……」どう答えるべきなのか迷った。

「何だ、言えないような恥かしい事でもしでかしたのか」

果たして男の目つきが鋭くなったのかどうか、眼鏡のない不自由さに苛立つ。

「デモに参加して……、公務執行妨害ということかと思います」

事実を言う以外になく、私はむしろ長引く沈黙が男を刺激することを恐れた。

「そうか、あんた学生さんなのか」

そう言ってから、会話を咎めようと身を乗り出しかかった看守を威圧するように一瞥した。看守が素知らぬ振りをして目を逸らすと、鼻で笑いながら男は勝手に身上話を始めた。

半ば安堵しながら聞くと、自分で思い込んだところの多い要領の欠けた話で良くは分らなかったが、どうやら男が好いた女の面倒をみているはずの商店主が、その女の窮状を知って援助を約束しながらなかなか実行しようとせず、それを見かねた男が女の名代で出向きいざこざを起こしたということらしい。男が丁寧に助けを乞うと、逆に女と深い仲になっていると疑われ、追い返された挙句に事件を起こしたという。

男は店主の不誠実さだけでなく女との間を勘繰ったことに激昂し、自宅に隠し持った日本刀を手にして舞い戻った。刀は単なる威嚇のつもりだったようだが、慌てふためいた店主が机の上の灰皿や花瓶などを投げつけ始めて、仕方なく鞘を取り払い抜き身で対抗したという。

「前科が二つあるからな、あれで抜かなければ執行猶予だろうが、今度は駄目だな。傷を負わせた訳じゃないが、抜き身を振り回したのだから……。殺人未遂といわれても仕方がないな」

男はまるで他人事のようにそう言った。前後の事情を汲み取って貰いたいという悔しさも、自制出来ぬ腑甲斐なさを嘆く訳でもなく、あるいはかえって女に迷惑を及ぼしたかもしれぬことを哀しむ様子もなく淡々としていた。全て納得しているということか。納得して責任を一手に引き受ける、それがその男の美学とでもいうようだ。眼を細めて男の顔の表情を捉えようとしたが、その輪郭も定かに見て取ることが出来ないほど薄暗かった。

「あの旗を巻かれることさえなかったら」と、私ならそう言うべきところか。旗が垂れていればあくまでそれは旗竿にすぎず、捲き付けられていれば機動隊と渡り合うための道具、つまり凶器と見做されるという。付け加えられるのは「公務執行妨害」か、それともでっち上げられるとすれば「傷害罪」があるが、さらに捩じ曲げれば「凶器」を振り下ろした「殺人未遂罪」とでも言われるのか。

「青痣が出来ているな」と、男が心配そうに覗き込んできた。

「消灯の時間だ、蒲団を敷いて静かに寝るんだぞ」と、監守がここぞとばかりに叫んだ。

汗臭く薄い蒲団に横になって、僅かに気が弛んだのか、明かりの消された静寂の中にいろいろなことが過ってきた。小さな格子の填められた窓から外を窺うことも出来ず、忍び込む冷気を防ぐにはあまりにも粗末な寝具に身を屈めながら、私はデモとはまったく関係ない女のことを思い浮かべた。あるいは同房の男の話に触発されたのかもしれない。美濃で高校教師をしている高田礼子は会う度に切なげに顔を顰めたものだ。瞳を輝かせたかと思うとすぐに曇らせ、あるいは閉じて、交わす言葉よりも、まるで言い表せぬ感情を読み取ってほしいとでもいうように目を伏せるのだった。

「メランコリーって、どう思いますか、素敵でしょう。平野さんはどう?」と、尋ねられたことがあった。それは礼子が赴任後暫くして、ようやく学校や新しい町に慣れた休日の朝早くに来てくれたときだ。女生徒たちの純朴さが嬉しくてたまらない様子であれこれと話した後、唐突に言われた。

「メラ……。何だって」

「メランコリー……。憂鬱とでもいうのかしら、字面も響きもとても素敵でしょう。今の私には似合わないかもしれないけど、でもどこかそんなメランコリックなところがあればいいのに、と思うの」

礼子はそのまま口を閉ざした。うな垂れ、微笑みも失せてみるみるうちに強張った表情になった。話す言葉さえ違い過ぎると哀しみ、失望しているようだった。

会うときは、ほとんどそんな具合だった。私が喋ることはあまりなく、もっぱら礼子が誰か彼かの小説について、おそらく自分の気持ちを代弁するように、あるいは遂げられなかった思いを託するように、熱っぽく語る言葉に耳を傾けるだけだった。

「体を合わせるだけが愛ではないでしょう……」

礼子はそんなことも言った。

それにしても留置所の夜は長く、寒々としていた。

足元には数本の吸い殻が落ちていた。陽光を浴びた川面がゆらゆらと輝いている。次の煙草を咥えた時、警報のような電子音の響きとともに何台もの警察車両が橋の近くにやってきた。重装備をした警官たちが車から降り立ち、行き交う車を誘導してほどなく橋の通行が遮断された。長い銃を抱えた警察隊が橋の両端に隊列を組んだ。遠くに離れた若者たちが慌ただしく動き始めている。陽はまだ高い。

真っ昼間から衝突するつもりはなさそうだったが、夜は荒れるに違いない。私は車の往来が途絶えた静かな橋を背にして部屋に向かった。

「ジェニー、今日は早く帰った方がいいぞ」

「どうしたの？」

「川向うにも警察隊が来ている」

「そうなの。でも問題ないわ、歩いて帰れないことはないから。それにマルコスの時に比べれば、なんていうことはないわ」

「マルコス？……」

「ピープルパワー革命よ。銃を撃っている人もいたわよ」

「拳銃か？」

「ライフルだってあったわよ。あれでフィリッピンはよくなると思ったけど、相変わらずね」

ジェニーはカーテンを開いてしばらく外を見つめていた。

「それに今は帰りたくないわ。さっき、私のボスの娘から電話があって大騒ぎらしいから」

「ボスの家？」

「息子とその彼女が昨日、逮捕されたらしいの。旺角（モンコック）でね」

旺角という繁華街でも週末毎にメイン道路の封鎖をめぐって警官隊との衝突が繰り返されている。テレビのニュースが繰り返しその様子を映し出していた。傘を広げ路上にかがみ込んで警官隊と対峙しているのは、わずか十数人程度の若者たちだ。向き合うデモ隊と警官隊の間にはごみ箱や付近から寄せ集めたがらくたなどが置かれていたが、バリケードというにはほど遠い、数人で簡単に撤去できそうな障害物程度だ。警告の後に催涙弾が発射され、しばらくするとデモ隊は後ろの交差点辺りまで下がり、また傘を広げて座り込む。警棒を振りかざしながら重装備の警官が襲い掛かると若者たちは路地へ逃げ込んでいく。その都度、数人が警官に抑え込まれ拘束されていく。押し倒された若者を三人、四人の警官が蹂躙する。すかさず数人の警官が記者たちのレンズの視界を遮ろうと壁を作るが、自撮り棒や両手を高く掲げて向けられるカメラには対処しようがない。振り下ろされる警棒が黒服姿の男の背中や太ももに食い込む様子がはっきり捉えられている。

「ボスの娘はしばらく、家に帰らないみたい。お兄さんのことを知ったら当然ボスも怒り狂うかもね……」

「そうか……」

通りの先にあるモールに繋がるオーバーパスが見えた。その下が沙田（サーティン）のバス停になっているところだ。そのバス停に向かって二、三十人の警官隊が歩いていく。眼下の道路わきに数台の警察車両が止まっていた。鎧の様な重装備の警察官の間を通行人が早足ですり抜けていく。通りの反対側のショッピングセンター前で客待ちをしていたタクシーが次々と走り去っていく。

「何を考えているの……」

アイロンの効いたシャツを畳みながらジェニーが私を見つめていた。

「香港が中国に返還され、五十年は従来通りという一国二制度が取り決められて二十二年が過ぎた」

「それで？」

「いや、どうなるか俺にも全く分からない」

「長くかかるの、この騒ぎは？」

「簡単には収まらないと思うな」

「何が不満なのかしらね、香港の人たちは。私たちのようなヘルパーを雇えるくらい収入もあるし、いい教育も受けられているのに……」

「……選挙で自分たちの政府を選びたいんだよ。フィリッピンもドゥテルテ大統領を選んだじゃないか」

「まあね。ドゥテルテは人気があるわ。でも国が良くなるには長い時間がかかるわね。私たちの一票なんかわずか百ペソで売り買いされるんだから。貧しすぎるのよ、フィリッピンは。私たちは生きるだけで精一杯よ」

「うーん。まあ俺だって似たようなものだ……。お互い長く生きると、生活の糧に気が取られる。家族があればなおさらだ」

「どうしたの、急に暗い顔になって……。でも、香港はフィリッピンよりは豊かだから革命なんてことにはならないわよ、そう思わない？」

「うーん、革命ね……」

返す言葉に窮して、私は黙って煙草に火をつけた。父親のことが思い浮んだ。

「思想だけでは食べていけない。世の中は平等とか正義とか、そんなことが通用するほど甘くないぞ。せっかくの学歴を棒に振るなんて馬鹿なことはするな……」

そんな言葉に私は頑として耳を貸さなかった。貧しくとも、信念をもって生きることの方が大切だという思いが勝っていたからだ。だが、歳を重ねた今になって父の言葉が鮮明に蘇ってくる。

「夕飯ここでいただいてもいいかしら」

ジェニーの言葉で夕暮れ時という時間に引き戻された。

解凍したご飯とレトルトのカレーで夕食を済ませてからジェニーを送った。封鎖された橋を避け、離れた通りでタクシーを拾うまでジェニーは一言も話さなかった。ヘルパーの給料では大家族の生活を支えるだけがやっとという現実を嘆いていたのかもしれない。

そのジェニーを送った帰りだった。普段は使わない地上階の出入り口に近づいたとき、アパート近くの暗がりに怒号が響いた。振り返ると十数人の黒服集団とその後ろを追う警官隊が見えた。石畳みとコンクリート壁に反響する靴音と罵声が迫ってくる。戸口に電子キーを当てドアを開け

ると同時に、駆け抜ける集団から数人の若者が私を押しながら雪崩れ込んできた。ゲートが閉まる音と同時に外側に警察官が押しかけ、警棒で鉄製の格子を叩いた。私は扉越しに何やら怒鳴り返している黒づくめの男女に構わず、エレベーターのボタンを押した。年老いたアパートの警備員が戸口に歩み寄り、扉越しに何度も指を突き出して警察官とやり合っていた。

「ここを開けろ」

「ここは私有地だ」

「開けろ」

「開けない。帰れ」

おそらくそんな遣り取りに違いない。入り口の堅牢な扉は閉まったままだったが、とっさに飛び込んできた黒服姿の三人は後退りをしながらエレベーターを待つ私の傍にやってきた。入り口の鉄扉の格子から警棒が差し入れられ、威圧が続く。エレベーターが開き、三人が私を取り囲むようにして乗り込んできた。ドアが閉まり、狭いエレベーターの中が静まり返った。背の高い一人と目があった。

「私の部屋にくるか」と声を掛けた。一瞬顔を見合わせた三人がほとんど同時に応えた。

「サンキュー、サンキュー」と、声が揃った。

十六階で降り、三人を部屋に引き入れた。二人の男はアンディ・チャンとチャーリー・タオ、女はミッキー・ソーと名乗った。開けた窓から四人で階下を覗き込んだ。赤いライトを点滅させる警察車両が見えた。

「あなたは日本人か？」と、ミッキーが外を向いたまま訊いた。

「ああ、日本人（ヤップン）だ」

広東語混じりで答えると、ミッキーはニコリと笑った。

「あなたに見覚えがある」と、長身のアンディが私の顔を覗き込んだ。

「……列車の中で水をくれたのはあなたでしょう、十日ほど前……」

「ああ、あの時の」

車内でやり取りしたときはマスクをしていたから誰だか分かるはずもない。三人の早口な広東語が飛び交う。コーラを差し出すと彼らは一気に飲み干した。

「やはり日本人はきれい好きなのね」

ミッキーが小さな部屋を見回してそう呟いた。

「はっは、掃除をしてもらったばかりだ。ところで、君らは学生かい？」

「二人は中文大、私は理工大よ」

チャーリーが一人重そうに背負っていたバッグパックを置き、中身を取り出した。出された荷物の中から奪いとるように自分のモバイルを手に取ったアンディとミッキーがメッセージを確認し始めた。どうやら全員が複数の携帯を

持っているようだ。チャーリーはタオルをミッキーの前に置き、スマホを握ったままアンディとミッキーの様子を眺めている。

メッセージを読み終えたアンディが大きく頷く。再び広東語の会話が飛び交う。ミッキーが仕切り、アンディが話し出すとチャーリーが神妙な表情で聞き入る。内容は分からないが、歯切れ良い語感からは微塵の躊躇（ためら）いも感じさせない。次第にミッキーの手ぶりが大きくなる。奥歯を噛み締めたままのチャーリーはミッキーを見つめている。

「仲間に合流しよう。モールに集う人々を援護しなければならない」と、アンディが急き立てた。

「焦っても仕方ないわよ。捕まっては元も子もない」とミッキーが言う。そんな遣り取りではないかと想像できた。

言葉少ないチャーリーが窓の外を見ていた。高層ビルの上に満月が浮かんでいる。

「日本はお盆休みでしょう」とミッキーが聞いた。

「ああ、帰るつもりだったが、あいにくと十三日のフライトだった」

私がそう答えるとアンディがすぐ反応した。

「それは申し訳ないことをした。飛行機を止めるつもりはなかったけど……」

「まあ、やむを得ないことだと思っている……」

「私たちは行き過ぎたかもしれない。でも、もう二度と起こらないわ。安心して」と、ミッキーが再び外の様子を見ながら言った。

「それは有難い」

「いつ帰るの？」

「それがまだ決まらなくて困っている」

「それは大変ね……。でも帰ったら、日本の人たちに私たちの思いを伝えてくれると嬉しいわ」

「……」

日本の報道は催涙弾が飛び交い、黒服姿のデモ隊が傘を広げて対抗する映像が少し流れる程度だろう。政治的な立ち位置についても曖昧な物言いに終始するだけに違いない。経済大国へと上り詰める途上で、日本は政治的な対決をタブー視して争い事を避けて来た。中間層をより富ませ、中庸を国是のように定着させてきた結果だ。

「ずいぶん多くの人が逮捕されているみたいだね」

「そうね。でも、四十八時間で出てこられる。起訴される人もいるけれどね」

ミッキーが険しい顔で答えてくれた。

「無茶な扱いを受けているという噂もあるけど、どうなの？」

ニュースやネットで見る限り、拘束時の乱暴さは昔も今も変わらない。だが、警察官に足蹴にされるとか馬乗りにされるという以上の非情さが漏れ伝わっている。

「逮捕されたら、女には辛いかもしれない。それなりの覚悟がいるわ」

ミッキーのその言葉にチャーリーの視線が泳いだ。セクハラどころではなく、強姦され中絶を強いられた学生がいるという話もあるくらいだ。

「もしも……、そうなったら、私は泣き寝入りなんかしない。とことん追求するつもりよ」

そう言い切ったミッキーをチャーリーが凝視していた。

留置所での目覚めはそれほど悪くはなかった。薄い毛布にも温もりはあって、まどろみながらも監守が出入りする気配に身体がすぐ反応した。小窓から射し入る光と触れる空気からすると、七時前くらいだろう。同房の男はとっくに畳んだ蒲団の上に座っていた。毛布もきっちりと角を揃え、瞑想しているかのようだった。運ばれた味噌汁と目刺しに唾液が溢れた。置かれた盆にすぐ手を出していいものか躊躇っていると、同房の男は自分の配膳を手元に引き寄せ黙って食べ始めた。

「食べな、遠慮することはないぞ」と言われ、箸を取った。

留置所なんて臭い飯と言われる麦飯だぞと、まことしやかに聞かされていたが美味しい白米だった。考えてみれば起訴か不起訴かそれさえ決まっていないのだ。刑務所とは違っていて当たり前かもしれない。アルミ容器という味気なさの割には味噌汁も旨く、私は全部を平らげた。

そういえば、高田礼子と初めて言葉を交わしたのも、同じ様な粗末な献立で食事をした時だった。その日は持ち金が底をつき、晩飯と翌日の交通費をどうするか思案していたところだった。運よく訪ねてきた友人に無心すると、わずかな小銭しか持ち合わせていなかったが、それでも空腹を満たすぐらいは出来ると近くの食堂へ行った。だが、いざ勘定の時に十円が足りず、ちょっとした押し問答になった。奥で一部始終を見ていたアパートの隣室だった高田礼子が、笑いを噛み殺しながら助けてくれた。友人が同じ国文科で顔見知りだった。なんとも情けない紹介のされ方で、最後まで含み笑いを続ける礼子に話し掛けることも出来なかった。翌日、私の郵便受けに米とソーメンが入っていた。添えられた手紙に健康へのいたわりと差し出がましく在り合わせのものを置いていくと、しなやかな文字で書かれていた。癖のない伸びやかな字を、その後何度となく読むことになった。

「今日は雨になるな……」

突然男が呟いた。高い窓を見上げて、それは私にというより、思わず知らず口に出たといった感じだった。課せられる量刑を推し量り、囲われる長さに無念を募らせていたのかもしれない。

「泣き言を言う訳じゃないが、刑務所の冬の寒さだけはこたえる」と、今度は面と向かって話し掛けてきた。

「まだそうと決まった訳ではないでしょう」

「同じようなものさ、どうせあいつは……」

そう言葉を呑んだ男の顔が眼鏡なしで見える気がした。沈黙の後、男が言ったように雨音がしてきた。ひたひたと間断なく聞こえ、やがて窓からひんやりと湿った空気が降りてきて膝のあたりに澱んだ。どのくらい経ったのだろう、房室から出るよう指示があったときは救われた気分になった。返された眼鏡を掛けると、回りが鮮やかな輪郭をもって目に飛込んできた。小さな窓を通して雨筋がはっきり見えたし、男の厳つい顔も額にある疵もしっかりと捉えられた。男の眉は想像していたほど寄せられておらず、眼光も失われていなかった。ただ逞しい肩幅や腕にもかかわらず、背が微かに丸まっているようだった。

小部屋に刑事が一人待っていた。

「担当の酒井だ、まあ気軽にしたまえ」

小柄だったが、どこか同房の男と似た風情の刑事だった。形の崩れ掛かったブレザーを着ていて、その服には見覚えがあった。よく集会やデモの群衆の中にいて鋭い目つきだったから、すぐに一般人との見分けがついた。

「よく眠れたかな。あまり居心地のいいところではなかっただろう」

剃り残した髭を撫でながら、間を置いた口調だった。とりあえずは様子を見るだけの挨拶程度といったところか。

「大変だね、君たちも。大将はのんびり歩道を歩いて指図するだけで、捕まるのはたいてい君たちのような普通の学生さんって訳だ。幹部はいい気なものだな」

酒井と名乗った刑事を見た。世間話をいつまでも続ける訳でもなかろう、そのうちに詰問を始めるに違いなく、おそらくその時には一転して恫喝か、あるいは見せしめの一撃を放つかもしれない。

「平野君、煙草はどうだ。僕のハイライトで良ければ何時(いつ)でもどうぞ。但し吸えるのはこの部屋だけだ」

うっかり返事をするところだった。まさか名指しを受けるとは思ってもいなかった。平静を装ってみたものの、すでに私のことを調べ上げているとは驚きだった。ことによれば普段私が好む煙草の銘柄さえ知っていて、わざわざハイライトと断わりを言ったのかもしれない。

「遠慮なんかするなよ」と、向けられた笑顔には詳細な調査は済んでいるという余裕が見て取れた。

あれこれと探りを入れられるのは親だけで沢山だ。だが、素性が知れているなら親元にも逮捕の連絡を入れるのか。二十歳越えれば成人のはずだが学籍を持つ者の扱いはどうなるのか判断がつきかねた。逮捕を知れば、親たちは刑事たちにすがりながら許しを乞うて回り、一方で私がまるで精神を病んだと言わんばかりに悲しみ、あるいはあらん限

りの言葉を尽くして怒り、罵倒するだろう。そして最後には涙ながらに親子の情に絡めた哀訴をするに違いない。どこまで彼ら警察が知り得ているのか、果たして高田礼子のことまで把握しているのだろうか。そうだとすれば、噂だけでも礼子の教員という立場を損なうかもしれない。

「しかし、あれだね……。プロメテウス団だったかな、ずいぶん奇抜な名前を付けたものだ」

刑事は煙草の煙を吐き出しながら上目遣いに私の反応を窺った。だが、私は終始のらりくらりとした応対を続け、午前中はとりとめのない話だけで終わった。

雑談を続け留置場に戻ると、同房の男の姿はなかった。取り調べ室の横の廊下を過ぎた様子もなかったが地検に送られたのだろう、蒲団と毛布が丁寧に畳まれて部屋の隅に置かれていた。独りでいると身には余る広さで、床の冷たさが身に染みた。

午後から本格的な取り調べが始まった。調書の作成ということだった。

「どうだった昼飯は。喰った後は眠くなるだろうが、しっかりお付き合いしてくれよ。書き込む俺の方が大変だからな」

刑事の酒井は爪揚枝を咥えたまま傍らの書類の束を軽く叩き、午前の雑談とは打って変わって無表情なままだった。

「そういえば差し入れがあったよ、ほら。学生さんは随分と豪勢だな」

机にぞんざいに投げ置かれた紙袋にロングピースと下着が入っていた。明らかに刑事の目は、学生の分際で高い煙草を吸うものだという敵愾心が込められていた。俺だって普段は「しんせい」か「いこい」という安物にきまっているじゃないか。手錠を嵌められるという特別な事情でもなければ滅多に口に出来ぬ代物だと、そう胸の内に呟き憮然とした顔を酒井刑事に向けた。それは一切黙秘するぞという意思表示でもあった。

「刑事というのは特に買収その他にうるさい。例え煙草一つでも問題にされるから絶対受け取らない。だから封を切って一、二本吸ってからさりげなく机に残す。そうすれば忘れ物、処分品ということでどうにでもできる。それが暗黙の了解事項で、扱われ方が変る。所詮、奴らはそんな程度だ」という話はもっともらしく流布された話のひとつだったが、留置所の麦飯と同じ類のことだろうか。ふとそんなことを思い出し、私は苦笑いをしながら五箱あったロングピースを刑事の前に積んだ。

「火を貸してくれませんか」

誰が差し入れてくれたのか、やはり橘江里子だろうか。下着も新品でおそらく朝一番に買い求めたのだろう。そういえば下宿先の捜査を心配すべきだった。万が一のときの手順は話し合っていたが、矢部はその通り関係するノート

やら書類を移すなり処分するなりしてくれただろうか。それにしても高田礼子からの手紙やら、礼子に宛てて書きながら投函せぬまま残った便箋などを破棄していたのは幸いというべきだった。

「さすがにロングピースだ、ハイライトじゃ真似出来ぬ香りだな。さてどうする、その様子じゃ黙して語らずってやつか」

「そんなところです」

「そうか、それなら俺もいちいち質問なんかしないからな。そこからでも読めるな。ゆっくり書くから答える気になったら喋ってくれ。そうでなかったらすべて黙秘ということで処理していくぞ」

取り出そうとしたハイライトをポケットに戻しながら、刑事は万年筆のキャップを回した。太い、充分にインクの入りそうな、かなり遣い込んだもののようだった。無骨な指は生まれついてのものか、それとも警官としての心得でもある柔道によるものか、それでも大きな万年筆は滑らかに走った。特別に習ったふうに見えない字は、しかし一文字ずつはっきりしていて読むには苦労しなかった。

問い【貴方の住所、生年月日、姓名を尋ねます】

「どうだ、反対側からでも読めるな。どうする、黙秘か。そうか、じゃあその様に書くぞ」

被疑者【言いたくありません】

問い【貴方は昭和四十五年十一月十四日午後七時頃、岐阜中央公園にいましたか】

被疑者【言いたくありません】

そう記入してから、酒井刑事はゆっくりと自分の煙草を取り出した。長くなりそうな事務仕事を憂いているかのようだった。

「いいか、偉そうに黙秘なんていう言葉を使うものじゃない。言いたくありませんと丁寧な言葉遣いをするものだ。これは親心というものだ。何せこれで検事の心証が違うし、この書類は永久に残るからな。そうすべきだと思わないか……。これが良識ある大人の配慮というものだ」

刑事はそう語気を強めると、時折漢字を思い出すようにペンを止める以外はじっと下を向いたまま調書を作り続けた。書く作業よりも読むだけのほうがはるかに早い。私は頁の終り頃になると目を走らせ、集会の始まりからデモへ移る間の自分の行動が事細かく記載されていく調書を眺めた。

読んでいるとそれは実にいい加減なものだった。まるで私個人に最初から最後まいで付き添って、手足の上げ下ろしまで見ていたかのように詳しい。しかし肝心な部分は何も特定されておらず、要は誰にでも当てはまるデモ参加者一般の様子をもっともらしく綴っているだけだった。

【貴方はデモの先頭に立ち、持っていた旗竿の旗を横にし

て、更に旗を竿に捲き付け警備の機動隊を何度も突きましたか】

【言いたくありません】

【貴方は制止しようとした警察官を蹴りましたか】

【言いたくありません】

当然にも、私の持った旗を捲きつけた男のことなど何処にも言及されていない。目を吊り挙げ、蒼白の頬を引き攣らせながら旗を丸めたのは佐々木という教育学部の学生で、彼は私が一時期住んでいたこともある葵寮という下宿屋の一員だった。

葵寮という学生専門の建て屋には二十数人が間借りをしていて仲間意識が強く、しかも破天荒な連中が多かった。農工学部の主流派だった党派には同調せず、政治主張を説くというよりは、直接自分たちが行動することが目的というか、そのことに満足しているような学生たちで、その寮生という連帯感でまとまった仲間は「葵寮軍団」と呼ばれていた。

彼らと一緒になって学部封鎖の挙に出たことがあった。それは農工学部の反主流派を集めて大学全共闘という、いわば非主流派の団結を計ろうという試みだった。いつもは主流党派と全面対決を避けていた者たちが今度こそは本気だ、党派との衝突も辞さないと意気込んだ。

頭数からすれば充分に党派と渡り合える、しかも「全共闘」という旗印はまだ参集能力があると考えた「葵寮軍団」や私たちは、十月二十日の国際反戦デー前夜にバリケード封鎖を実行した。夜、暗くなってからの実行と決め、大学近くの葵寮が集合場所にされた。ヘルメット姿の私たちに気がついた風呂帰りの佐々木が寄って来た。

「何やら、ものものしい雰囲気ですね」

「教養部を封鎖する」

誰かがそう答えるやいなや、佐々木は持っていた洗面道具を外に置いたままヘルメットを被り、後に付いてきた。その時の事を思い出すと苦笑いするしかない。佐々木はサンダル履きで、まだ濡れたタオルを首に巻いたまま何度も「すごい、すごい」と繰り返しながら「平野さん、火焔瓶はあるんですか」と、擦り寄ってきた。風呂上がりの石鹸の香りが妙に鼻についたものだ。

教養部のA棟に入った途端、佐々木は一人喚声を上げて「バリケードだぁー」と、拳を振り上げながら誰もいない廊下を駆け抜けた。皆が唖然とするのを尻目に、どこにそんな力があるのかと驚くような勢いで机や椅子を講義室から引き摺り出し入り口に向かって放り投げた。本来なら棟の戸口あたりで全員が揃い、矢部のアジテイションを聞きシュプレヒコールを上げる段取りだったが、そんなことにもお構いなく、初めてのバリケード封鎖という大事がいともあっさりと実行された。

部活動で残っていた数人が物音で飛出してくると最初は茫然としていたが、しばらくすると一人が近くにいた佐々木を捕まえて異議を唱え始めた。

「何でこんな無茶なことをするんだ」

「封鎖だよ、封鎖。バリケードだ、バリストだ」

佐々木はそう叫んでから立ち尽くし、一瞬我に帰ったようにあたりを見回した。

「平野さん、ここ、ここですよ。何故封鎖するのか言ってやって下さいよ」

「こんなところで人の名前を呼ぶな、バカ。相手にならずに放っておけ」

私は半ば呆れながら佐々木を一喝した。しかし、佐々木はただ肩を竦めただけですぐに元気よく机を運んで、結局翌日まで居残った。

「何だよ、さっきから何をニヤついているんだ。えーっ、学生さん。最高学府に行っているからって馬鹿にするなよ」

突然刑事は机を力一杯蹴り上げてきた。万年筆を持つ手が小刻みに震えていた。私は無表情に相手を眺めた。向けられる憤りには、ただじっとしているに限る。噛み合うことがないとはっきりしていれば、むしろ沈黙を続けるほうがいい。母や父との遣り取りで散々思い知らされたことだ。だが、刑事の酒井は自制が効かぬほど昂ぶって、ペンを持ったまま机を強く叩いた。アルミの灰皿が床に飛び、吸い殻が散った。首筋に冷たい感触があり、手に取ると黒いインクだった。

「この野郎、お前がプロメテウス団とやらの一員だということはお見通しだぞ。中部安保ともつるんでよからぬことを考えているようだが、俺たちは全部知っているぞ。村松幸治を戦闘員にしたのはお前だろうが、あんな奴には何も出来やしないけどな……」

一瞬私はインクで汚れた指を握り締めた。調書の内容から推しても、振りかざす権威の割にはろくな情報も掴んでいないようだが、意識されているのは「プロメテウス団」という組織で、どうやら関東安保共闘、中部安保共闘という武闘やテロを画策する集団と繋がっていると考えているようだった。私が思わず感情を出しかかったのは、そのとんでもなく飛躍した筋書きとともに上げられた名前が村松幸治だったからだ。公安当局が私と村松を一括りに見るのは仕方のないことかもしれない。村松とは随分長いこと一緒に行動してきたし、あるいは彼が日々過激になっていくことを止め得なかったという意味では、私にも責任の一端があった。

村松とは、私が親から逃れるため二カ月ほど東京に行き、戻った後に親交を深めた。家に戻れず塒（ねぐら）を失った私が、友人の紹介で居候を決めた先が村松の下宿だった。当時村松はむしろ左翼の過激さには懐疑的だったが、それでも古着

から当面の食事だけでなく私のアルバイトの世話までしてくれた。一方で村松は学生運動諸派の歴史やら違いに興味を持ち始めるようになった。最初は党派の名前やその組織員数程度だったが、次第に細かいところまで知りたがるようになり、一つ一つ答える代りに党派の資料やら本を渡すと、明け方まで熱心にそれらを読み耽けるようになった。私は村松の蔵書から仲間うちで評判の小説を借りた。互いに読んだ本について意見を交わしたりしていると、ある日謄写版印刷の小冊子を半ば強引に勧め是非にと感想を求めてきた。それは文芸部の機関誌で詩やら短編が、おそらく作者自身が書いたのだろう、それぞれ違った字体で載せられていた。詩が三篇、小説が二篇、評論が一篇あって、何故だか村松は私がそれに目を通すまで息を詰めたように横に座っていた。

「どうだった。どう思う」

読み終るまで一時間ほど掛かっただろうか、村松は焦れたように身を乗り出してきた。「どうだといわれても……」

私が言い澱んだのは、詩はともかく短編のほうは書き手の二人をよく知っていたからだ。

「正直言って、これだから文学というやつは厄介で、僕には手に余る」

「厄介？」

「いや申し訳ない。書いた本人を知っているから作品よりもそちらが気になってね。本当はそんなことではいけないのだろうけれど、でも何だかこういうものを読むと、彼らが書くために、そのどう言えばいいのか……」

「書くために恋愛をし、セックスをしているという訳か」

「ああ。この千島洋子だっけ、これもね……」

村松は大きく首を傾げ腕組みをすると、一息吐いてから顔を顰めた。

「そうなんだ、僕もそんな気がするんだよな」

「……なるほど、千島洋子か。君と同じクラスの子だよね。合点がいったよ」

私がそう決めつけると、村松は視線を外して自嘲気味に口許を歪めた。

「いや、笑ったりして悪かった。君みたいな真面目人間に突然のことだったから」

村松はなおもじっとしている。

「実をいうと、本当に文学について聞かれると困る。それ以上に、評論とは関係ないかもしれないけれど、恥かしながら僕はまだ……、女を知っている訳じゃない。だからこの手合いのものの感想を気にされるのも辛い」

私がそう言い終わらないうちに、村松が応じた。

「僕だって同じだよ」

「そうか。何だか女々しいね、僕等は」

「同感だ。それでよく革命なんて言っていられるものだ。

驚き桃の木だ」

「それは関係ないと思うけどなあ……」

そう笑い合った二週間後の夜だった。街頭のビラ配りを終えて村松の下宿に帰ると部屋は真っ暗で、しかし、押し戻されるような固い雰囲気が漂っていた。明かりを点けようとしたそこに、村松が闇を凝視しながら座っていた。炬燵のスイッチも入れず、まるで息を止めているようだった。

「平野君、この僕を指導してくれないか。明日から僕も革命に生きる」

低く、くぐもった抑揚のない声だった。千島洋子に軽くあしらわれたと直感できた。

「……今までとは違う世界に入り込みたい」

学生仲間が口にする「革命に賭ける青春」などという、酒席の戯れ言を村松の口から聞かされるとは思わなかった。それでも、すぐに平静に戻るだろうと高を括り、暫く連れ立って行動することにした。しかし、数日で音を上げるだろうという予測は外れた。名古屋だけでなく大阪に出向き機動隊の激しい規制や催涙弾のなかを走る経験もさせたが、それが裏目に出た。振り下ろされる警棒、立ち込める催涙ガス、飛び交う瓦礫、流される血、泥まみれになって逃げ惑う人々、それらを直視する度に村松は言葉少なになり、党派の機関誌に没頭するようになった。

「結局、何をしても権力に散り散りにされてしまう訳だ」

浴びせられた催涙剤の混ざった水に濡れたまま、そこから立ち上るガスの為か、あるいは流したのは本当の涙か、村松は絞るような声を上げた。頬を伝う汗を拭う手の甲の傷から血が流れていた。その後に村松は一人で名古屋やら東京へ出掛け、戻る度に過激な物言いをするようになった。

「平野君、僕はいずれ地下に潜るよ」と、ある日あっさりとそう言った。

その頃、私はもう自分の下宿を見つけて、村松の部屋には週に一度位足を運ぶ程度だった。村松がこともなげにそう言ったとき、彼の書棚は小説の類も一切なくきれいさっぱりと片付けられていた。

「当面はK重工のミサイル生産反対の闘争を続ける。だから近くに移り住むつもりだ」

「それでは僕とまったく逆になるじゃないか」

「そういうことになるね。でも、君は農学部から教育へ転部するつもりだろう」

「ああ、今手続きをしているところだ」

「それは良かった。僕はもう卒業するつもりもないから、何処に住もうと構わない」

そう言い切った村松はしばらくして中部安保共闘という集団を伴って現われた。後日、K重工に数人で押しかけ、ミサイル生産中止と叫びながら正門突破を試みて仲間二人が逮捕された。そんな繋がりからすれば、あるいは私が村

松を運動に挽き込み、非合法戦士として仕立て上げたように映るかもしれない。

私は結局転部を果たせず、そのまま農学部に籍を置いて村松の近くの下宿先に移った。再び互いの往来が容易になり、しばしば村松は私の部屋に出入りして、今度は村松の方が私を頼るようになった。ナンバリングの鍵も当然村松には教えてあって、留守でも自分の下宿のように使っていた。ただ、私の方に変化があった。卒業後に美濃の高校へ赴任した高田礼子が、気紛れのように私を訪ねて来るようになっていた。ちょうどそんな期待をしている時に、村松は久しぶりに私の部屋で休息を取ったようで、どうした訳か片付けもせず帰って行った。いつもならゴミも纏められ、食器も水洗い程度はしていくものを、その日に限って食べ滓もあたりに散乱していて、饐えた匂いが鼻を突いた。あるいはその頃すでに公安の厳しい監視を受けて余裕を失っていたかもしれない。

瞬間に立ち上った激情に駆られて、私は金物屋に走った。一回り大きく丈夫そうなナンバリングの鍵を買い求め、それ付けて外出した。数十分で自分の愚かさを詰りながら戻ったときは、もう手後れだった。遠くに足早に駅に向かう村松の後ろ姿が見えた。叫べば声が届かぬ距離ではなかった。聞こえぬとも走れば駅までには追いつけるはずだった。だが、身体が竦んだ。村松の名を、あるいは叫んだかも知れない。村松の顔色までは窺い知れなかったが、真新しい鍵を手にしたときの驚きと一瞬にして消えた信頼に対する怒りよりも、哀しみが募ったに違いない。二度ほど村松のアパートを訪ねたが会うことが出来なかった。村松が知り合いに「地下に潜る」と言い残して岐阜から離れたと聞いたのは、その後しばらくしてからだった。

無性に煙草が吸いたくなった。狭いキッチンの換気扇を回し、その下で吸っていると寄ってきたミッキーが私の煙草を指さした。火をつけてやるとミッキーは紫煙越しにチャーリーを見遣っていた。化粧気もないミッキーは眉を寄せたまま二度目を深く吸い、ゆっくりと溜め息を漏らすように煙を吐き出した。ミッキーの広い額に高田礼子の面影が重なった。

「大丈夫、すぐ出ていくから」

ミッキーのその言葉を危うく聞き逃すところだった。

「……問題ないさ。ゆっくりしていればいい」

「ありがとう……」

頭上の古びたファンのモーター音が煩い。遠くで鳴り響く警察車両のサイレンのようだ。今のところはミッキーたち武闘派の闘いはうまく機能している。警察の暴力性を引き摺り出し、その暴挙に対する人々の怒りを政府に向かわせている。モールを突然占拠する集会も市民から抗議を受

けることもなく、一緒にシュプレヒコールをしてくれている。

だが……、先行きはどうなるのか。国境を隔てた隣街の深圳(シンセン)には治安部隊が集結し、睨みを利かせている。国際世論の後押しが大きな力添えになるにしても、しかし、決着はつまるところ体制内変革がなるか否かということに尽きる。相手は強固だ。長い闘いになることは間違いない。

「各国の人民と連帯して……」と、かつて繰り返し聞いた枕言葉が過る。だがミッキーたちはあくまで「香港を取り戻せ」を旗印にして、十三億を統治する中国の変革などとは一度も言っていない。あくまで国際公約である一国二制度のもと、香港の自治を訴えているだけだ。だが、そこに齟齬がある。五十年という猶予期間は、市場開放を進める中国が、やがては完全な資本主義、すなわち欧米式の民主国家になるはずという、そうした目論見が前提だったはずだ。いわば欧米に豊富な資金力を背景にした香港中国の経済発展は政治的な駆け引きでもあった。だから、わずか七百万都市の香港は急発展してきた。だが、いわゆるリーマンショックという世界的な不況で立場が逆転した。経済的に低迷した香港をテコ入れするために、より多くの中国人を呼び込み、年間三千万人以上、ひと月で二百五十万人が本土からやって来て、旅行者向けの個人商店も大繁盛した。

雨傘運動と称される公明な選挙制度を求める運動が挫折したのは、そうした小売業をはじめとした層が中国人客を必要としたからだ。だが、さすがに粉ミルクが買い占められ、生まれた子供は香港の居住資格を得られるということで産院のベッドが本土の中国人に占拠されるほどになって、香港人のアイデンティティーを呼び起こした。ミッキーたちの行動もそんな背景がある。香港返還交渉で、鄧小平が「それなら香港への送水管を締める」と言われたサッチャーが譲歩を余儀なくされた結果が五十年間という「一国二制度」だった。それと同じ構図だ。北京政府が一声、人民の香港への出境禁止を宣言すれば、香港には致命傷になるに違いない。人民解放軍の戦車が押し寄せるというような世界各国の非難を浴びる大事にするまでもなく、香港は経済的にもすでに中国に牛耳られている。十三億を統治する権力に対して、わずか七百万が抗う構図だ。もちろん数がすべてではないにしても、相手は途方もなく大きい……。端(はな)っから白旗を降ろす私は無気力な老人だからか、はたまた日々の生活に汲々とするしかなかった敗残者だからか。思わず出る溜め息を隠すように話題を変えた。

「家族はどうなの、君がデモに参加していることを知っているのか?」

ミッキーが私の言葉に頷いた。

「両親は知っているわ。でも、よくは思っていないわ

ね。だから私はチャーリーのところで寝起きしているの。チャーリーの親たちはオーストラリアで事業をしていて留守だから、好都合なのよ」
「なるほど。チャーリーの親はどうなの、理解しているの？」
「とんでもない。分かったらチャーリーはすぐオーストラリアに連れ戻されるわ。仕事をしている人たちは中国寄りが多いし、躊躇うのは仕方ないわね。だから、私たち学生が頑張るしかないのよ」
ミッキーはそう言い、紫煙を払いのけた手で髪をかき上げた。耳の後ろに警棒で打たれたような細長い痣があった。
「アンディも一緒にいるのかい？」
「アンディがどこにいるか知らないわ。詮索しないようにしているの。アンディが指示を受けて私たちの役割を振り分けるのよ。情報漏れが嫌だし、逮捕されて拷問を受けるかもしれないでしょう」
「そうか……」
そう頷いたとき、チャーリーが書棚代わりのカラーボックスの中から取り出した赤い冊子を掲げて何やら広東語で叫んだ。ミッキーが奪い取るようにして冊子をぱらぱらとめくった。
「これは何？」
三人ともが強張った表情をしている。それは「毛沢東語録」だった。日本語読みしか思い浮かばず、かろうじて「……マオズウトン」と、不慣れな中国語で言ってみた。
「それは見れば分かる。あなたは毛沢東主義者（マオイスト）なのか」
チャーリーが気色ばむ。
「うーん。説明が難しいな……」
「僕の家にもあったよ。お祖父さんが持っていた」と、アンディが間に入ってくれた。
「……何というか。昔は日本の多くの若者はそうした本をよく読んでいた。僕らの頃はベトナム戦争の真っ最中だった。日本は二度と戦争は起こさないと宣言した国だったから反戦と平和のために大勢が声を上げた。そんな時代だった。僕らの頃は民族自決と独立を掲げることが正義で、共産主義が自由と平和の象徴だと信じる人が多かったのさ」
「馬鹿げている」と、チャーリーが吐き捨てるように言った。
「続けて。聞くわ」
「うーん。僕の英語は貧弱すぎる……。申し訳ない」
「いいよ」とアンディが私を見る。
私は傍らのノートとペンを取り出した。同じ漢字だ、いざとなればそれを書けば意味は通じやすいと思った。
「それで、あなたは反政府の運動家だったということ？」とミッキーが訊いた。
「まあ、学生時代はね……。そうだった」

私は「造反有理」という毛沢東が文化大革命の時に発した言葉を紙一杯に書きなぐった。
「これは僕らの頃には、結構有名だった」
「その言葉は今でも僕らが使っているよ」と、アンディが頷いた。
「中国関係の本が多いのね」
チャーリーが書棚から出した本をミッキーが見遣った。
「廬山会議」「鄧小平」とか「大躍進」とかの文字が並んでいる。
かつて、毛沢東と中国は多大な賞賛を受けていた。すでにスターリンの虚像は知れ渡っていて、共産主義の将来は中国に託されているように思われていた。だが、大躍進にせよ文化大革命にせよ、党内の権力闘争の実態が明らかになるにつれて、そうした評価は薄れている。幹部同士は既存の権益を守ろうと足並みを揃えながら、しかしその一方で自身の地位を脅かす者を潰そうとする様は会社勤めで嫌というほど見てきた。所詮権力は腐るということは避けられないのか、それとも地位に対する執着心が理性を失わせるということなのか。中国共産党が独裁と見なされるようになるとは思い描けなかった。
「それで、今はどうしているの？」
「ただ精一杯働いていろいろな仕事に就いた。それで縁があって香港に来た」
アンディが分厚いピケティの「21世紀の資本」という本を両手で持ち上げた。
「僕はまだ読んでいないけれど、これはどう？」
「うーん。利益を求める資本主義の実態がよくわかる。でも、民主主義とか自由を説く本ではないかな……」
「なるほど……。でも読む価値はありそうだね。もっとも僕はもっぱら文学書ばかりだから……。ハルキ・ムラカミは好きだよ」
「ハルキ？……。ああ、村上春樹ね。そうなんだ」
「ああ、彼はいい。好きだよ」
「そうか。アンディ、君にも素晴らしいガールフレンドが一杯いるのか？」
「まさか。現実は小説のようにはいかないよ」
アンディが初めて笑顔を浮かべた。
「だからアンディの話には余分な言葉がありすぎて、時々迷うのよね。中文大らしいけど」と、ミッキーが少々語気を強めた。
「……今は、ロマンスなんて語る時じゃないのよ」
そのミッキーの言葉に、チャーリーの眉がかすかに動いた。
「革命はロマンだと思うけどな……」と、アンディが肩をすくめた。
「違うわ。論理的帰結なのよ、革命は」と、ミッキーがぴしゃりとやり返す。さすがに理工大女子だ。

「……」

「その点だけ毛沢東は正しいわ。革命は人民の軍隊の銃口から生まれるのよ、そうでしょう？」

「ああ、毛沢東語録にはそんなことが書かれている」

私はチャーリーが手にした小冊子を指さした。チャーリーが手の中の赤い本とミッキーを交互に見ていた。

「ところで僕らの闘いをどう思う？」

少し間を置いて、アンディが苦笑いを浮かべながら話題を変えてくれた。

「うーん……」

答えに詰まった。アンディたちの闘いに賛同するかという意味なのか、それとも闘いの結果について聞きたいのか。

「目的は理解しているつもりだ」

確かに今はまだ広汎な支持は続いている。中学生ですらホールに座り込むほどだ。デモの現場に出られない多くの社会人も資金や物資面だけでなく、深夜遅くまでデモを続けても家なりに送り届けるような協力もしているようだ。だが、まだ数か月足らずだ。投げられる火炎瓶も警察隊に直接向けられてもいない。あくまで煽動という程度に過ぎない。大学も休校処置がとられているから学生同士の軋轢も表立ってはいない。だが、長引いたらどうなるのか。私たちの頃で言えば「戦争反対」を旗印にした全国的なデモの盛り上がりを背景に、大学のバリケード封鎖が各地に広がったばかりの状況だ。とても数か月で結果が出るとは思えない。学生に限らず、多くの逮捕者が出るだろう。

アンディは頷くわけでもなく黙ったままだ。私を見つめているふうもなく、焦点が定まっていないようにも思える。一つの事に集中するというより、雑多なことに向き合っているように見えた。デモに明け暮れる緊張の中では取るに足らない話やら、悩ましいことも起きる。私たちのときにもいろいろなことがあった。

教育学部内で中心的に活動していた宮本が突然集まりに出てこなくなった。宮本の下宿先を何度も訪ねてようやく彼の本音を聞き出したとき、仲間の誰もが言葉を失った。僧家の一人娘で、ゆくゆくは婿取りをして壇家の取りまとめをするのが定めと考えていた相手の女が、前々から宮本に対して仏教大学へ再入学して僧侶になるようにと頼み込んでいたらしい。

「どうやら私を取るか運動を取るか、彼女が迫ったようね。親鸞かマルクスかって泣いて縋ったらしいから」というのが、江里子が聞いた話だった。

「結論を出して、今は下宿に戻っているらしいわ」

そう言われて矢部とともに宮本の部屋へ行った。宮本は押し黙ったまま、覚束なさだけを滲ませていた。

矢部が苛立ったのは、ようやく宮本が絞り出すように仏門に入る決心をしたと言った後に、震える声で相手の女の名を出したからだ。

「彼女に何度も政治闘争からは手を引くように言われて……。僕は坊さんになるしかないです」と、宮本はそう言って嗚咽をもらした。

「俺たちの政治性って、そんな柔なものかよ！」

そう言った矢部の居丈高な声は忘れられない。

モバイルの画面を覗き込む三人に矢部や橘江里子たちの姿が重なる。あるいは、一時期連れ立って歩いた村松幸治の思いつめた顔が浮かんだ。バリバリの党派の活動家ならいざ知らず、多くの人の心は脆いものだ。些細なことで気持ちは大きく振れる。一時期ある党派の行動について回っていたことがある。執拗な親たちの干渉から逃れるためもあって、東京日比谷での全国集会や新潟の自衛隊基地へのデモに参加した。大阪の政治集会には、闘士になると息巻いた村松とともに出かけた。すでに諸党派が入り乱れ党派間の諍いが激しくなり、「内ゲバ」と言われる衝突が頻発している時期だった。

ある日、私と村松はバリケード封鎖中のO市立大学に泊まることになった。時期的に夏季休暇中ということもあって、長期の学園占拠といっても緊張感もないほどに静かだった。臭い貸布団の中で寝ていると、ヘルメット姿数人にたたき起こされた。

「戦線派の夜襲があるようだ……」

「機動隊じゃなくて戦線派が？」

「昨日戦線派事務局で暴れてやったから、その報復らしい」

「事務局にいた奴をかわいがりすぎたか……」

そんな遣り取りが聞こえた。戦線派とは労働組合員との共闘を巡る論争で袂を分かったとはいえ、いわば、兄弟のような関係と思っていたが、当時はすでに紙上の論争だけでなく激しく直接対立するようになっていた。異論を唱える党派間で凄惨なリンチによる死者まで出て、憎悪がむき出しにされるようになった頃だ。五流十三派とも言われる政治党派同志の軋みも頂点に達し、一方で機動隊殲滅という勇ましいスローガンがXX派殲滅に変わるようになっていた。

角材で武装した大勢がなだれ込んできたら防ぎきれるものではない。相手が機動隊ともなれば多勢に無勢ということで一旦撤収すれば済むことだろうが、政治路線を巡る抗争相手には面子が先に立つ。党派の活動家が顔を引きつらせながら「武装」と叫び続けた。出入り口に積まれた長机や椅子が引き倒され、壊された。背もたれや下段からちょうど身の丈ほどの長い棒が取れた。私と村松の足元に転がされたのは、ヒノキの角材に比べてはるかに重く硬そうな木の棒だった。だが、つなぎ合わせの両端部分に木片や長い釘が飛び出していた。

「おい、平野。こんなのを振り下ろしたら、ヘルメットどころか頭に突き刺さるだろうよ」

夜目にも関わらず村松が青ざめているのが分かった。

「ああ、即死だな」

「やばいぜ、これは」

そんな私たちのやり取りを聞いた党派の活動家が歩み寄ってきて村松の手から棒をつかみ、突き出た釘を見つめた。

「……」

角材を村松に戻した男は黙って去って行った。私と村松は顔を見合わせて立ち尽くした。寄りかかった樫の木の棒が重い。長椅子を叩きつけて壊す音が廊下に響きわたる。黄色い電球が風に揺れ、影が踊る。やがてレンチやジャッキ類を持った数人の男が現れ、黙って突き出した釘や尖った木片を叩きだした。それを見た村松が大きく頷いてメガネレンチを手にした。カーンカーンと軽快な音が重なり合った。椅子を壊し終えた男女が村松のレンチを持って行き、同じように棒の先を叩いていた。

木目の中に食い込んだ釘を電球に明かりにかざして、村松が満面の笑みを浮かべた。

「これが革命家のやさしさというものだ。そうだよな、そうだろう」

村松が喜々としてそう言った。

「……」

私は答えることも出来なかった。釘があろうがなかろうが、二メートルもの重い棒の一撃だけでも十分な威力がある。あるいは防御に徹するだけで事足りると思っているのか。日和見主義者を粉砕するとなだれ込んでくる相手側にも角を丸める節度があると信じていいのか。故意であろうとなかろうと流された血から憎悪が生まれることはないのか。理論の正当性は、相反する集団を打ちのめす暴力を容認できるというのか。流血も厭わない殴り合いという現実を前にして私の気持ちが折れた。戦い抜くという思いはたとえ獄に繋がれることがあろうとも挫けるはずもないと考えていた。だがO市立大学での夜明けを待つ間に、私は党派の闘士にはなれないことを悟った。

果たしてアンディはどこまで戦い抜くつもりをしているのか。アンディたちの息遣いが狭い部屋に籠る。過ぎた半世紀近い時の長さに溜め息が漏れた。メッセージの受信音がして携帯を覗いたアンディがミッキーを呼び寄せた。携帯の画面を見せながらチャーリーの同意を求めるように話し掛けた。

「……元朗（ユンロン）……」

アンディの言葉から場所が聞き取れた。チャーリーは定まらぬ視線のままだが、ミッキーが腕時計を見ながら大きく頷いた。広東語のやり取りだからほとんど理解できないが、状況は感じ取れた。市民への無差別テロが行われた元朗地区では連日のように大規模なバリケードが築かれている。おそらく、アンディの携帯に届けられたのはそこへ合流しようという呼びかけだったに違いない。

もちろん当局への届け出や認可などない集まりだ。群衆が少なくなる深夜には、対峙する警察隊との激しい攻防戦が繰り広げられている。それに加えて元朗地区はいわゆる反社会的組織が根を張っている土地柄だけに、三つ巴の争いが懸念される場所だ。やくざ者集団ともなれば牛刀を振りかざすことも厭わない。手にしたやわな傘程度だけでは、容赦のない攻撃を防ぎきれるはずもない。チャーリーの目が泳ぐのも無理はない。

狭い部屋に静寂が満ち、クーラーと換気扇の回る音だけが響く。いつもなら通りを行き交う車や遠くを走り抜ける列車などの雑音が聞こえてくるはずだが、沈とした夜が更けていく。アンディは指をせわしく動かせて何やらメッセージを打ち込んでいる。ミッキーは瞬きもせず、アンディの檄文を読み解くように彼の指先を見つめていた。チャーリーの吐息がミッキーの髪を揺らせたように見えたが、あるいはエアコンから吹き出した風のせいだったか。

「僕にも一本くれないか」

チャーリーが私の煙草を指さした。

キッチンに移り、箱からぎこちない手つきで取り出した煙草に火を付けてやると、チャーリーは勢いよく吸い込み大きくむせた。今夜の元朗（ユンロン）での示威行動がどれほど激しいものになるか分からない。だが、深夜の路上占拠ということになれば投石用に歩道のレンガが剥がされ、バリケード用に柵や器物が壊されるに違いない。

「大丈夫か？」

「無問題（モーマンタイ）」

手にした煙草をかざしてチャーリーは広東語で応えた。

「……」

「アンディの警護が僕らの仕事だから」

「アンディ？」

「ああ、彼はグループ長だから逮捕されないようにしている。ミッキーがいつもそう言っている。そのミッキーを守るのが僕の役目だ」

「そうか……」

「あなたは逮捕されたことはあるのか？」

「ああ。一度だけだが、ある」

「裁判は？」

「いや、起訴はされなかった」

「そうか……。警察で暴力は受けなかった？」

そう聞かれて、取調官の顔が浮かんだが、もう昔のことだ。

「ああ、乱暴されることはなかった。逮捕の瞬間は痛かっ

たけれどね」
「そうだよね。日本は優しい国だからね」
チャーリーが煩く回るファンを見上げた。
「……香港は、荒っぽいようだね」
拘留され辱めを受けたという話ばかりではなく、ネット情報ではすでに数人が不審死を遂げているという。飛び込み競技の選手でもある女子高生が全裸の溺死体で見つかったが、自殺ということで早々に火葬された。飛び込み選手が溺れるはずもないという疑念は素人でも抱くものだ。夜中にアパートの部屋から投身自殺した大学生も日夜デモの先鋒を務めていた男だった。チャーリーたち仲間同士には、もっと多くの生々しい情報が伝わっているに違いない。
「ええ、手足を折られた人もいる。それより心配なのは大陸へ送られるかもしれないということかな」
「……そんな話、ネットに出ているけれど実際どうなの？」
「多分、本当だと思う。リーダー格の人たちは日頃から狙われている。逮捕された後、行方不明になっている者が何人かいる。日本でも公安の調べはあるよね？」
「身辺調査？」
「そう。ミッキーの親も上司から警告されたくらいだから」
「そうなのか……。君の家族は、どうなの？」
「オーストラリアにいるから、まだ知られていないと思う。それに僕はただの参加者だから、公安も手が回らないよ。アンディはもう徹底的に調べられていると思う。決めていたアメリカ留学を諦めたくらいだから……」と言いながら煙草を吸ったチャーリーは、また咳き込んだ。

当局があれこれと調べるのは当然だろう。デモが収まった後の平時でも監視は続く。私の場合は十年以上にわたって公安に付き纏われた。転職先の勤務中に呼び出しの電話を受けたことがあるから確かだ。当然私の住まいも分かっていて、近場の喫茶店を指定された。ちょうど、企業連続爆破の犯人という一人が逮捕され、指名手配をされていた相方を追っている時期だった。
果たして労務課にまで私の活動歴が知らされていたかどうか分からない。だが、何年かして職場の先輩が私の学生時代の行状を仄めかしたから、会社にも伝えられていたということだろう。そうした公安当局の動きのせいかどうか、先々で不採用の憂き目にあった私の友人は、教職に就くため地方の政治家に金を包むということまでした。お蔭で何とか臨時教員にはなれたが、それでも本採用には至らず結局数年で家業の農業を継いだ。そんなことを見越して、学卒であることを隠して個人経営の工場の現場に入った者もいる。それでも公安当局はしっかりと追尾をしているに違いない。
無事に卒業して開業医になれた先輩は特例ともいえる。

前園というその男は全国動員された東京でのデモで捕まった後、小菅の拘置所に収監されていたから起訴されたはずだ。確か、私が成田の空港建設反対闘争に行く途中、小菅によって面会した覚えがある。レンガ造りの壁に沿って歩き、漫画週刊誌、果物と煙草を差し入れた。医者ともなれば国家試験のはずだから、実刑を免れ資格喪失にはいたらなかったのだろう。卒業後しばらくして開業し、結婚もしたらしい。
「保険証を持って来たら、いくらでも小遣いを稼がせてくれるってさ……」と、人伝に聞いた。わずか数年での変わりようだった。
「捕まらないように、気を付けなよ……」
私はそんな言葉を飲み込んだ。チャーリーには藪蛇になるかも知れなかった。警備隊と対峙する現場では様々な葛藤があるだろう。渡辺直道という名が浮かんだ。渡辺は教育学部の穏便な組織から転身した男だ。全共闘運動の高揚とともに左派のなかでも比較的大人しい党派に入り、ある日名古屋の集会に参加することになった。当時、新宿での街頭制圧が影響を与えていて、デモはどれだけ長く地域を「開放区」にするかを競うようになっていた。そんな折りに東海地区の動員が掛かったとあれば、機動隊との力の対決になることは充分予想されたことだった。渡辺は幹部に言われたままに出掛け、寸前になって「逮捕も辞さぬ戦闘要員だ。筋金入りの活動家になるか否かの分岐点だ」と、告げられた。
「前科一犯を誇るヤクザじゃあるまいし、捕まるだけが能じゃないだろう」
そう言いながら、渡辺はいつも暗く顔を伏せた。
逮捕は即座に教師の道を閉ざすことを意味する。だから渡辺は大学の外へ出た。正門前の路上に構築されたバリケードは僅か数分で機動隊に押切られ、火炎瓶も人のいないところで黒い煙と炎を上げるだけだった。そこで十数人が逮捕されたという。
「逮捕されていくのを見ているとね、何とも遣り切れない思いがしたよ」
渡辺はそう呟いた。
「……敵前逃亡だもの」という言葉を聞きながら、彼とは徹夜で碁を打ったものだ。

「君はどうするの？」と、携帯を見るチャーリーに聞いた。
「僕はオーストラリアでMBA（経営学修士）を取るつもりだ」
「さすがに香港人だな、感心するよ」
「まあね。あっ、ちょっと待って僕のヘルパーからだ」
そう言ってチャーリーは両手の親指を使ってメッセージを打ち込んでいる。
「まったく、いちいち聞いてくるなよ……。役に立たない

ヘルパーだ」と、呟いだ。

「……」チャーリーのぞんざいな物言いが気になった。

私たちの時であれば、ホロコーストにも等しいウイグル民族の抹殺を問題にするなら、不当な扱いを受けるヘルパーたちの解放に向けた闘いも取り組むべきだと誰かが言い出したはずだ。基地の騒音に悩む人たちにも連帯を呼びかけよう、土地の強制収用される成田にも連帯して闘おうという様々な文言が思い出される。私が二十歳過ぎだったら、アンディたちに正面切って論争を挑んだかもしれない。今日の香港は明日の台湾だということは、確かにその通りだ。ならばスカボロー礁を巡るフィイリッピンはどうか、南沙諸島のベトナムは、あるいは九段線と称されるマレーシアやインドネシアは、明日にはという危急性はなくとも翌々日や明々後日には起こりうる対立とは思わないのか。公平な選挙権を授かる程度という大衆受けの声は、確かに近々行われる区議会選挙で民主派の底力を見せるだろう。だが、行政長官や議員の選挙は、制度の変更がいる。現行の中国派が占める議会が自らの首をしめる法案を通すはずがない。

通すためには本土の北京政府の意向を無視するしかないわけで、それは二制度それぞれに主権があると宣言するに等しい。そうであれば闘いの真の相手は中国の一党独裁政権だと明言することになる。「時代革命（革命の時だ）」というスローガンは独立宣言だと、言い切れるのか。一歩下がって手すりから身を乗り出し声援を送る人たちに、武器を手に立ち上がれ、ともに戦線に向かおうと決意させるだけの「新政府の綱領」を提示できるか。期待した欧米の世論や政治的圧力が少ないと嘆く前に、「一国二制度」という中国内の争いではなく、そこに謳われる一国の是非を巡る世界的な戦いにしない限り未来なんてないのだ。そう叫ぶ若い私は、拳を挙げているに違いない。スローガン並べているだけなら、今がそうであるように、戦車などなくても催涙ガスを含んだ放水車や強硬な機動隊で蹴散らかされたまま、尻尾を巻いて敗退するしかないのだ。二十歳の自分が口角泡を飛ばしている。

チャーリーが吐き出した紫煙を眺めながら、私は台所のステンレス槽に煙草を投げ入れた。少し残っていた水に触れた火先からかすかな黒煙が上がったが、一瞬で消えた。

「……オッケー、それで大丈夫だ」というチャーリーの命令口調の声が聞こえた。

刑事は数度机に軽く打ち付けた煙草を咥えて、勝ち誇ったようにマッチを擦った。

「それほど深刻になることはないさ。洗い浚いを知られているからって泣くこともない。他の奴らのことだって大抵分かっているからな。どうだ、素直に話す気になったかな」

そう言った刑事のペンを持つ指の動きには余裕が滲み出ていた。

「駄目か、仕方のない奴だな。二度と聞かないからな」

【貴方はプロメテウス団の一員ですか】

【言いたくありません】

【プロメテウス団は中部安保共闘と連帯する組織ですか】

【言いたくありません】

【プロメテウス団は共産同赤軍派の支援組織ですか】

【言いたくありません】

【貴方は今後も暴力的な破壊行動を行うつもりですか】

【言いたくありません】

半日で、煙草一箱がなくなった。刑事の関心は専らプロメテウス団の実体を掴みたい一心のようだった。刑事は汚れきった灰皿を片付けながら、雑談だよと断わりを入れてから、もう一度そのことに触れた。

「俺も昨夜調べ直したよ、プロメテウスというのはあれだろ、ギリシャ神話にあるやつだろう」

「言いたくありません」

刑事が腹を立てるだろうことを承知の上で、私はそう答えた。座り続けて流石に背中が痛く、煙草を取り上げられるにしても、それ以上神経を張り詰めたくはなかった。

「ふん、旗竿一つ満足に振り回せない革命ごっこのくせに、態度だけは一人前だな。そのうち痛い目に遭うぞ」

予想した通りの反応だった。私は負けずに睨み返して、差し入れの袋を前に出した。酒井刑事はプロメテウス団という奇天烈（きてれつ）な名前に惑わされている。自立した活動家を目指そうとXXX団という呼称にしたのは、冗談半分の話から決めただけだ。党派のような綱領など決められる力量がある訳でもないが、しかし数人だけは明確な論議を交わせる核となるべき先鋭だから、やはり名前がいると捻り出しただけだ。わいわいと言い合ううちに、パルチザンのような機動性をとか、毅然とした決意を示すために矢部組にしようかという話にもなった。

「XXX組って、まるで暴力団だな。それならスパルタクス団でもいい」

「いいじゃないか、それも」

「馬鹿な。だったらいっそパルチ団というのはどうだ」

「パルチザンの語呂合わせか。まあ、党を名乗るなんておこがましすぎるいから団にする方がいいかもしれないな」

そんな遣り取りで決まったのがプロメテウス団に過ぎない。しかも、その中核になるべきメンバーもいなく、もう実態などありはしない。理論的支柱だった江本は会社を解雇された後、実家の不動産を継ぐ資格を取るために忙しい。いつもべったりと寄り添う橘江里子を気遣ってか議論を掘り下げることを避けている矢部は、男たちだけになった途端唐突に過激な言動をする始末だ。片や私は三度目の留年

をする腹固めも出来ず、矢部や江本あってのプロテウス団だと退き、諦めかけている。勇ましく岐阜の地から世界へなどと叫んでいたものの、すでに空しいだけだ。私は刑事に気持ちを悟られないように目を閉じた。

その日の夕方だった。耳の奥に金属音が響いていて、目を開けると監守が鍵束で鉄格子を叩きながら手招きをしていた。

「さっきから呼んでいるだろう、どういうつもりだ」

罵声にも似て、荒げた口調だった。

「接見だよ、接見。弁護士が来られているから、早くしろよ」

監守は眼鏡を差し出して、廊下の扉をさかんに気に掛けていた。拘留人にはぞんざいな態度が取れても、公的な権威を持つ弁護士には頭が上がらないようだ。急かされて連れて行かれたのは独房のように狭く、軋む木製の椅子がぽつりと置かれているだけの部屋だった。

「弁護士の宮内です。遅くなりましたが救援対策部に依頼されて来ました」

声は壁から聞こえてきた。振り向くと小さな穴がコンクリートの汚れと見紛う程度に開いていて、相手の鼻と口だけがかろうじて見えた。朗読するような抑えた話振りに、弁護士らしさがあった。

「見えますか、私の身分証明書です。いいですか、確認出来ますね」

顔を寄せると、穴には細かい網が掛かっていて、余程近づかないことには文字を判読することが出来なかった。

「何か不都合でもありますか」

「いえ、大丈夫です」

「取り調べに行過ぎはありませんか、あれば遠慮なく言ってください。ここの話は聞かれることはありませんから」

「今のところは特に不具合はありません」

「黙秘を続けているようですね」

「そうしています」

「調書の作成は終わりましたか。終わっているようでしたら午後には地検に送られることになります。念の為に聞きますが初めてですね、逮捕は。それでは地検での尋問でいろいろと訊かれますから、住所氏名誕生日だけをはっきりと答えてください。他は黙秘ということで構いません。それで起訴猶予という形で放免されるはずです。よろしいですか」

淡々とした遣り取りだった。

「よろしいですか」と、弁護士は繰り返した。

私は小さな穴を見上げた。ふと囚われ、独りのままの姿が脳裏を過った。

「……地検でも黙秘したら、どうなりますか」

かすかに息遣いが乱れたように感じたのは思い過しだろうか。沈黙の後に、空咳がしてから変らぬ口調の応えがあった。

「更に拘留されることになります。でも、それほどの価値があるとは思えませんが」

「価値……」

私は言葉を切った。果たして中に留まることではなく、外に出て元の生活に戻ることに価値があると断言出来るのか。

「そうしたいのですか」

再び弁護士の問いがあった。

「いえ、そういう訳ではありません」

「黙秘だけが闘いではありませんから」

諭すような言い方だった。

「住所氏名だけでいいのですね」

「それだけでけっこうです。支援の方に伝えることがあれば言って下さい」

「何もありません、有難うございます」

眼前の厚い壁や留置場の鉄格子、腰紐や手錠が不自由なのではない。自分を取り囲むものは、名前を名乗ることだけで取り払われるような簡単なものなんかでは決してない。漠然とそんな思いがしただけだ。

「地検でも黙秘を続けるつもりなのですか」と、そう問い掛けられた言葉に顔を上げた。壁の小穴から眼鏡の銀打ちのフレームが見えた。私の様子を窺おうと顔を寄せていたから、あるいは何度か同じ質問を繰り返していたのかもしれない。

「いいえ。御指示の通りにします」

「そうですか、それなら結構です。何か期するところがあるように見えたものですから、心配しました」

私は立ち上がって一礼した。

「それでは帰ります。くれぐれも投げやりになったりしないように。いいですね」

「はい。お世話様でした」

壁の向こう側に靴音とドアの軋みが響くとほとんど同時に、後方の鉄製の戸が動いた。廊下からの黄色い光が筋になって、私の足下を照らした。まるで導きの明かりのようだった。踏み出した足が止まった。住所と名前を答えれば解き放されると分った。だが、ふと思い浮かんだ黙秘し続けることと氏名を明かすことの選択が、何故だかとてつもなく重大なもののように思えた。

外では多くの人が行き交い、その中に私を待つ者がいるかもしれない。誰が立っているのだろうか。矢部か渡辺か、親たちがいることはないにしても、江本の姿はあるだろうか。まさか旗を捲きつけた男の顔があるはずもないだろう。再び独りきりになった房室は蒲団も毛布もなくなっていて、剥き出しの床は小窓から差し入る光の明るさを湛えていた。

房の奥まで進んで立ったまま、空を眺めた。壁に目をやると窓の下の部分が特に黒ずみ、そこだけ引っ掻き疵が目立っていた。外に憧れた者たちが残したのか、下の床の汚れが多いのはそこに足先を付け小窓の格子に手を掛けて外の様子を窺ったからだろうか。

時計も眼鏡も取り上げられ、用を足すときには尻を曝け出し使う紙の枚数まで制約を受け、勝手に水を呑むことも許されない屈辱感も、寂しさや辛さも、怒りも湧いてこない。馴染むほどに、何時からだろう前からすでに厚い囲いのなかに入っていたのだと、ふとそう思えてきた。

地検への移動は二時過ぎ頃になった。酒井刑事が腰に細いロープを結び手錠をつけた私を先導して、取り調べ室横の裏口から外に出た。制服の警官二人に脇を固められて小型の護送車に乗せられた。

「どうした、やけに神妙な態度じゃないか。すぐに裁判という訳じゃないぞ。ふてぶてしさも、もうお仕舞いなのか」

刑事の酒井が鼻先で笑いながら、裁判という語句に力を入れた。私はどんな表情を見せたのか。真っ先に思い浮かんだのは眉間を寄せた高田礼子の顔だった。

「今度は照れ笑いか、まあ誰でも弱気になるものさ。お前さんだけじゃない」

そう刑事に言われたところをみると笑ったのか。この場に及んでまたぞろ礼子のことを思い浮べる自分に呆れた。

地検では暫く待たされたものの、拍子抜けするほどあっさりしたものだった。罪状は単なる公務執行妨害とされただけだった。名前と住所を問われて、一瞬の躊躇いがあったが、淀むことなく答えられた。

「起訴猶予処分とします。拘留はしませんから手続きが終わり次第帰っていいですよ」と、検事は大きく腕を振り下ろして書類に判を押した。

ドアの外にいた酒井刑事はもちろん不起訴になることを承知していたことだろう、黙ってロングピースと汚れた下着が入った紙袋を投げて寄越すと、階段の方を指差した。

警察署に比べれば遥かに明るく広い廊下だった。リノリウムの床は照明の光を湛えている。腰にも手首にも、もう何の枷もない。たった一つのゴム印で二日間の鉄格子とうす汚れたコンクリート壁の小部屋から放されたのだ。

「俺は……」と、意味もなく呻き声が洩れた。

「平野さーん、ここですよ」と、呼ぶ声がした。

開いた扉の間から橘江里子が手を振っていた。飛び跳ねながら精一杯注意を引こうとしている。腕とともに髪が揺れていた。まばゆい昼下がりの光を背にしていたが、江里子のこけた頬と窪んだ目がはっきり見えた。矢部の気持ちを引き留めようと救対活動に専念する疲れが滲んでいた。その江里子の必死の思いが強くなればなるほど、それを振り切ろうとするように矢部はより過激な言動をするように

なっているに違いないと、そんな気がした。

返された私物から、財布に入っていた八折の紙を広げた。次に会う時があれば高田礼子に読んでもらおうと書いた詩だった。折った角が擦り切れ、不鮮明になった字もある。

すべて邪悪の根源である暗闇の中で
風に流されてくる蜘蛛の糸が
ぼくたちの青春の
アリバイなき空間にまとわりつくとき
世界は静かに壊死する
灯が急速に陰り
空は萎縮を始め
音という音がこの地上から消え失せて
果てしなき宇宙空間の広がりだけが残る
そしてぼくたちは
空白の意味さえ知ることができず
重みや痛みすら感じられない空間のなかで
ただ
秒針が規則正しく時を刻むのを見つめるだけだ

そこにはしかし当然のように
ぼくらは
長針や短針の姿も文字盤もみることはない
回っていきまた回ってくる秒針だけが
動いている

講義を受ける気にもならず、デモを煽動する気も失せた時に書いたものだ。

「何を読んでいるの？」江里子が私を覗き込んでいた。

「ろくでもない詩だよ」

「誰の？」

「……」

私はその紙を折り畳み、それを勢いよく破り捨てた。小さな紙片が足元に散り、風に吹かれて歩道を舞っていった。

五十年前のあの時、地検前の道に立ったその時に何を捨て置いたのかよく分からない。分からないまま歳を重ねて来た。糧を得るためだというのは言い訳であり、開き直りにすぎない。ありていに言えば、要は若かったということか。いや、そう言ってしまうのはあまりに軽々しすぎる。全てのことを言葉にしようとし、その言葉の定義づけに躍起になり世界のあらゆるものを取り込もうと藻掻いた挙句に、現実からますます遠ざかったということかもしれない。それにしても、五十年という月日を一つ一つ積み重ねて来たという気がしない。時はただ流れただけだ。流れに身をまかせ、気が付けばいつしか老いを恐れている有様だ。

「ありがとう」というミッキーの声に引き戻された。アンディはすでに靴を履いている。礼を言いつつ笑顔を浮かべていたが、目は笑っていない。鋭くはないがじっと遠くの一点を見つめているようだった。かつて何度も見た後ろ姿だ。果たして彼らもまた、脆く崩れ去る繋がりの中に生きているのか。催涙弾の直撃より、ミッキーの何気ない一言がチャーリーを打ち砕くようなことにならないか。あるいはアンディはより過激な方向に走り、猜疑心に囚われ仲間を攻撃するようになっていくのか。そんなことを思いながら、私は扉を閉めた。

翌日の朝、テレビでは香港の各地で起きた騒乱ともいえる状況が流されていた。観光名所でもある黄大仙（ウォンタイシン）や旺角（モンコック）、政府庁舎に近い銅鑼灣（トンローワン）、そして元朗（ユンロン）でも警察隊と激しい衝突を繰り返していた。大通りに竹竿やらごみ箱を積んだバリケード、そこに雨傘で防御するデモ隊員に向かって打ち込まれる催涙弾という見慣れた光景が映し出される。警察隊が進み出ると雨傘の一団は後退し、距離を置いたところに再び座り込む。一人二人、前に進み出て投石をする黒づくめの若者がいるが、すぐに仲間の中に逃げ戻る。

時折虚を突いて警察隊がなだれ込むと、雨傘の一団は雲の子を散らすように脇道へと逃げる繰り返しだ。それでも、逃げ遅れた者が屈強な警察官に抑え込まれる。一旦取り押さえられれば華奢な若者はなす術もなく、引きずられながら連行されていく。騒擾を煽るように火炎瓶が投げられるが、火の手が上がるのは警察隊のはるか前の方だ。火炎瓶の直撃を受ければ焼死もあり得ると自制がきいているのか、あるいは、近づきすぎればたちまち囚縛されると気後れしているのか。

「はっきり総括してみろよ……」と、そう言って私を平手打ちした男の顔が浮かんだ。男の被ったヘルメットのZの文字が蘇ったが、果たしてそのアルファベットの意味すら思い出せない私は、ただただ狼狽えるだけだ。一晩で数十人が拘束されている。大学生だけでなく高校生も逮捕され、すでに延べで数百人は逮捕されている。だが私に出来ることと言えばアンディやミッキーたちが無事でいてくれることを願うくらいだ。

「お前が行っていることは正しいかもしれない。だが、何もお前が先頭に立つことはなかろう。きちんと卒業していい会社に勤め、それから声を上げればいいじゃないか。せっかくのチャンスを棒に振ることはなかろう……」

私の父の言葉が繰り返し思い起こされる。

「死なばもろとも」と退路を断って進むミッキーたちは、獄中に落ちてもなお自由を求めて雄叫びを発し続けるだろうか。はたまた数か月後には、ミッキーのことを諦めたチャーリーは家族のいるオーストラリアのオフィスで安穏

と香港のニュースを眺めているかもしれない。それでも街中には「光復香港」と叫ぶ若者が溢れ、後に続くだろう。あるいは武闘派の一部は、より先鋭的な行動へと傾斜していくかもしれない。香港の警察隊が一斉に銃口を向ければ、さらに破壊力のある手立てに走る者も出るだろう。街角で爆発物を投げるような、そんなことも起きるかもしれない。空き缶やグラスを片付け、私は窓辺に立った。眼下の往来はいつも通りの賑わいを見せている。陽光が狭い部屋に満ちる。私は新しい煙草を咥えて外を見遣った。

矢部の放ったアジ演説が口に出た。

「本日の闘いにー、結集されたー、労働者、学生、市民の皆さん。いまー、まさにー、締結されんとしている……」

昔を思い出しながら、老兵は静かに去るのみか――ミッキーたちと肩を組んで「香港を取り戻せ……」と唱和する気力もなく、窓を押し開いた私は通りをぼんやりと見下すだけだ。強い風が吹き抜けカーテンを揺らせる。

ふと五十年も身を潜めていた村松幸治がぎょろりと目を剥き、デモ隊の先頭でアンディとともに立っているかもしれないと、突拍子もない考えが一瞬浮かんだ。村松とアンディがライフルを高々と掲げ、すぐ後ろにチャーリーとミッキーが互いの手を握りしめ後続の若者を鼓舞するように「待ちに待った好機到来だ」と叫びながら催涙銃を構える警官隊に突進していく。村松の顔だけでなく無精ひげを生やした矢部の姿が過る。にやけ面（づら）した佐々木が現れ、袈裟（けさ）を纏（まと）い坊主頭にヘルメットをのせてやってきた宮本や寡黙な江本が浮かんだ。切望した教職に就いた数年後、激しいデモに参加して獄中に落ちた渡辺が振り向きざまに見せた不敵な笑みがのぞく。泥にまみれたままへたり込む仲間たちが鮮明に蘇り、その姿が私の体内に確かな脈流を呼び起こした。

テレビニュースの騒擾音に混じって響き渡る「香港を取り戻せ」という甲高い声を聞き、私の鼓動がさらに高まる。短くなった煙草を指で摘まみ深く吸い込んだ。最後のその一服が隅々までの血管を絞り上げ、全身に力を漲（みなぎ）らせる。窓ガラスに映り込んでいたのは仁王立ちした私だった。

（「季刊作家」99号より転載）

鈴木友範
すずき　とものり
1948 岐阜県下呂市生まれ
73 岐阜大学農学部卒業
89 ファインアンドソフトテクロノジー株式会社設立
代表取締役就任
2003 自費出版「愛惜の炎」刊行
05「季刊作家」同人
21 小島信夫文学賞県知事賞受賞

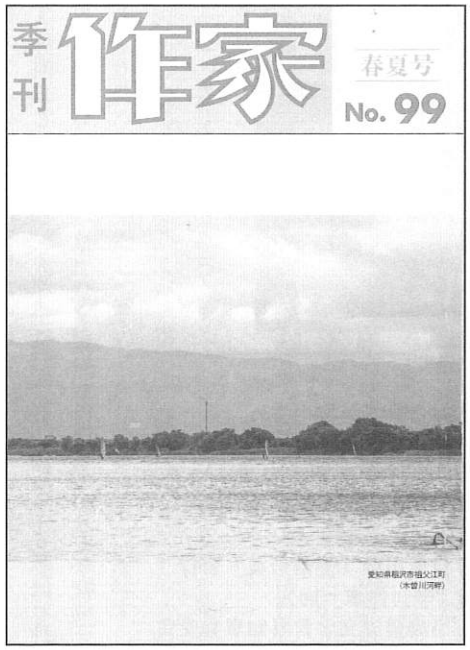
季刊作家

愛知県

門戸は広く　豊かに生きるために

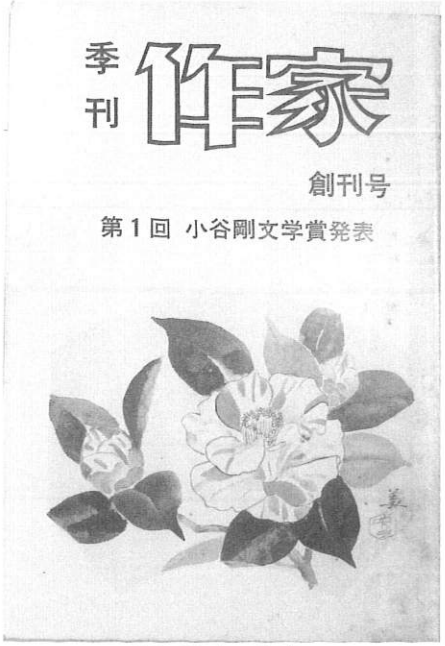
『確証』で芥川賞を受賞した小谷剛氏が主宰をしていた文芸同人雑誌『作家』は、彼の死により五百十六号で終刊した。小説を発表する場所を失った同人たちは路頭に迷った。小谷氏の薫陶を受けている同人も少なからず存在し、リニューアルした雑誌の発行を望む声も多く聞かれた。

それに応える形で、小谷氏の盟友の『長良川』で直木賞を受賞した豊田穣氏が編集責任者となって一九九二年（平成四年）の春『季刊作家』が誕生した。当時五十七名の同人が参加し、年四冊の発行で始めることになった。毎月発行されていた『作家』は四半期に一冊に減ったが、作品の集まりも資金繰りにも懸念されることはなかった。その後、柳瀬道夫氏、今瀬憲司氏等に編集代表が交代し、筆者が編集代表を引き継いだのは二〇一二年夏号（第七十七号）からで、現在に至っている。本年四月一日に第九十九号を発行し、この間に掲載した小説は六八一余編になる。この十月には百号を発行する予定になっている。創刊号から三十年になる。長い期間のようにも思えるが、過ぎてしまえばそんなに長く感じられることもない。



この三十年の間に、鬼籍に入ったり施設に入所したり、高齢や病などそれぞれの事情で、離れていった同人は多く、現在の同人数は二十人にも満たない。年四冊の発行も三冊になり、今は二冊となってしまった。同人数も年を経るにつれ一人減り二人減りという状態であり、たまに加入があっても若い人の加入はない。時代が変わり、同人雑誌に小説やエッセイを書こうとする人が減ったのであろうか。創刊時のような余裕はなく、書き手の減少はそのまま原稿の集まりも資金繰りもままならない事態を招いて、危機的状況が続いている。例えば創刊時点での『文學界』の同人雑誌評に寄せられた雑誌数を調べてみると、百六十余

冊を数えるが、その後を引き継いだ『三田文学』に寄せられている雑誌はその三分の一ぐらいであろう（推測であるが）。むかしは同人雑誌に執筆することにより小説を書く技術を磨き、プロ作家を目指す書き手も普通に存在したが、今はそういう崇高な志を持つ書き手はまれで、読書が好きでも創作することまではいかない、あるいは同人雑誌で修業を積んで作家を目指す人も減少していると思われる（アニメ作家のほうは逆に増えているような気がするが）。だから、同人も増えていかないのだろう。憂える状況は全国的に広がり、多くの同人雑誌も同じ悩みをかかえていると察せられる。わが『季刊作家』も同様で、この先いつまで発行できるか不安だ。



「季刊作家」創刊号

一方、こんな現状にあっても、大手の文芸雑誌の新人賞への応募は、以前と変わらず、否、むしろ増えている文学賞もあるようだ。二千編を超える応募数の文学賞も珍しくない。同人雑誌で育ち、そこからプロの作家を目指すことは困難で、そうであるなら、まずは新人賞を受賞して注目されるほうが手っ取り早いということなのだろう。最近は活字離れが進み、月に一冊の本も読まない若者も多いと聞くが、あにはからんや新人文学賞は若者からの応募が少なくないようだ。そんな若者が目を見張るような傑作を書けるとは思えないのだが。そうであるなら、同人雑誌に加入して、小説修行をする方法もあると思ってもよいだろうが、忙しい世の中に生きている若者は、時間を持て余している老人のように、同人雑誌に小説等の文章を書いている暇などないということか。現代の若者には、小説を書いて自身の能力や運を計り、駄目なら諦めてほかのことを探ろうとするようだ。

悲観的に考えることが多いが、小説を書いて完成し、それを読んでもらうという行為を長い間続けている筆者には、これほど心を湧き立たせる生き甲斐はほかに見当たらない。いつでもスムーズにペンが進むわけではないが、一度味わったら虜になるに違いない。書くことは、いつでも何歳からでもできる。それに手書きだった原稿も、今ではパソコンで書けるようになり作業も格段に楽になった。筆

季刊作家 ═ 孤独に打ち勝つ意思 ═

者も三十年近くパソコンで書いている。

筆者は時折ぶらっとスーパーへ足を運ぶことがある。すると嫌でも多くの老人が、長椅子に腰かけて休憩をしている姿が目に留まる。こういう姿をみると、この人もあの人も退屈地獄に病んでここに来ているのだと思ってしまう。豊かに生きようとしている人はこんな所で無駄な時間を潰していないからだ。三年ほど前からコロナという厄介なウイルスが流行しているが、執筆する行為は巣籠り状態で行うものなのでそんなに影響はないと思う。もともと小説を書く行為は、孤独な作業であり、孤独に打ち勝つ強靭な意思が必要であり、しかしそれが作品として完成すると、この上ない喜びとなって報われるのだ。それは、人が、より充実した人生を生きることでもある。

（季刊作家代表／祖父江次郎）

季刊作家
編集事務局代表　祖父江次郎
〒495・0013
愛知県稲沢市祖父江町二俣上川原八四・二
TEL　0587・97・5472
mail: chi00987@yahoo.co.jp

作家の遺言は、死に臨んで純粋に自己と向き合い、飾り気のない一人の人間として自己の意志を発露している。それは作家自身の素顔に迫るもので、死にざまは生きざまに通じる。

1728円（税込／送料共）
御注文はアジア文化社まで

鳥影社刊

1700円　御注文はアジア文化社まで